

撰集考異

中

11

309

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



11-309



撰集考異第三

拾遺和歌集

春

霞をよみ侍りける

きのふこそ年はくれしか春かすみかすかの山にはやたちけり

萬葉集には作者なし、六帖朔に出でて、作者本集におなじ、赤人集にも見えたり、三十六人集も同じ

延喜の御時月次御屏風に

素性法師

新玉の年たちかへるあしたよりまたるゝものはうくひすの聲

六帖朔に出づ、作者も本集に同じ、三十六人集には作者家持とせり、素

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

大正
9. 1. 7
内交

性集にはあれども、家持集にはなし

題しらす

よみ人あらず

わかやとの梅にならひてみよしの、やまの雪をし花ごこそみれ

みつね集の詞書に、延喜十五年二月廿三日、仰によりてたてまつる御屏

風のうた」とあり、活字本おなじ

天曆十年三月廿九日内裏哥合に

中納言朝忠

うくひすのこゑなかりせは雪きえぬ山里いかてはるを知らまし

金玉集、公任卿十五番哥合、ごもに作者中務ごせり、中務集、朝忠集共

に見えず

もゝそのにすみける前齋院屏風に

つらゆき

白妙のいもか衣にうめのはないろをも香をもわきそかねつる

新撰朗詠作者深養父ごあり、貫之集にも見えず

わかかなを御覽して

圓融院御製

かすか野におほくの年はつみつれごおいせぬものは若菜なりけり

中務集、詞書、朱雀院の御時歌めすに奉る「いまさらに老の袂にかすが

のゝ人わらひなるわかなつむかな」御覽じてひげこにわかかな入て少將を

つかひにて賜る「春日野に云々御返事「年つめごおなじさまなる若菜に

もけふだにわれやあえんごすらん」とあり

題しらす

大作家持

かすか野にあさる雉のつまてひにおのかありかを人にしれつゝ

萬葉八に見えて春の野にとあり、六帖雉に出でて作者なし、二の句朝な

くきじのごせり

たゝみね

子の日する野邊に小まつのなかりせは千世の例に何を引かまし

六帖子日に出づ、作者本集におなじ、忠見集にもみゆ、朱雀院の御屏風

にと題せり、金玉集にも作者たゝみとせれご如何あらむ

題しらす

よみ人志らす

梅の花よそなからみむ我妹子かとかむはかりの香にもこそしめ
後撰春上に既に出づ

そてたれていさわか園にうくひすの木つたへちらす梅の花みむ

萬葉集十九に作者、大和國守藤原永手朝臣とありて、このうたみゆ、拾
遺抄作者大和守永平とあるはおそらくは誤ならん

ともすれば風よるにそあをやきの糸はなか／＼亂れそめける
能宣集おなじ、活字本柳邊風と題せり

題しらす

ふく風にあらしひかねてあしひきの山の櫻はほころひにけり

赤人集に、春雨にあらしひかねてわがやごのさくらのなはさきそめに
けり」とあるいとよく似たり

菅家萬葉集の中

あさみとり野への霞はつゝめごもこほれて匂ふはな櫻かな

寛平中宮歌合にも作者みえず

天曆御時御屏風

忠 見

春くれはまつそうちみるいそのかみ珍しけなき山田なれとも

重之集にもみゆ、初春と題したり、活字本おなじ

題しらす

よみ人志らす

さくらかり雨は降り來ぬおなしくはぬるごも花のかけに隠れむ

六帖雨に出づ、結句かけチしたとせり、日本風土記、題を摘花過雨と
おきて、此歌をあけたり

故郷のかすみとひこえゆく雁はたひのそらにや春をくらさん

六帖雁に出づ、二の句霞とびわけ、結句春を過らんとせり、本集一本に
は二の句霞おしわけとす、亭子院歌合作者興風とあり、興風集に見えず
延喜御時藤壺の女御哥合のうた

あさ毎にわかばくやとのには櫻花ちるほごはてもふれてみむ

六帖庭櫻に出づ、うた本集におなじ

題しらす

よみ人あらす

さはみつに蛙なくなり山吹のうつろふかけやそこにみゆらん

六帖蛙に出づ、亭子院歌合にも見ゆ、春部云、後六々撰高遠がうたに沼水にかはづなくなりうべしこそきしの山ぶきさかりなりけり」とある、詞似て意ことなれり

年のうちはみな春なからくれななん花みてたにもうき世すくさん

寛平中宮歌合に下の句花みてだにもこゝろやるべくとあり、春部云、後葉和歌集春屏風のうた、平兼盛、ひとゝせは春ながらにもくれなゝん花のさかりをあくまでもみん」とあるに似たり

夏哥

題しらす

みつね

手もふれてをしむかひなく藤の花そこうつれは浪そをりける

忠見集詞書屏風の繪に霞たつ山より瀧おつ、きしのほごりに藤の花さけり」とあり、歌の二の句こゝにはをしむとあり、活字本おなじ

たこのうらの藤花を見侍りて

柿本人麿

たこの浦のそこさへにはふ藤波をかさしてゆかんみぬ人のため

萬葉十九に、十二日遊覽布勢水海船泊於多枯灣望見藤花各述懷作歌四首のうち、作者次官内藏忌寸繩麿とあり、本集柿本人麿とあるは、蓋し誤なるべし、また人麿集に入たるも、この誤をうけたるなり

題しらす

よみ人あらす

やまかつの垣根にさける卯の花はたかしろたへの衣かけしそ

六帖卯花に出づ、かきねチかきほ、かけしそチかけしかとせり、みつね集にもみゆ、活字本またおなじ

ときわかすふれる雪かこみるまでに垣根もたわにさける卯の花

後撰集に既に出づ、六帖卯花に見えたり、一本時ならぬ雪のふれるとあり

初聲のきかまほしさにほととぎすよふかく目をも覺しつるかな
重之集夏二十首の中にみゆ、下の句よふかくのみもおきあかすかなとあり、群書類従本本集に同じ

夏山をこゆて

久米廣繩

いへにきてなを語らんあしひきのやまほととぎす一聲もかな
萬葉集十九にみゆ、初句家に去而、結句一音毛奈家とあり、六帖郭公に出づ、初句家にいきてせれど、餘は本集におなじ

延喜御時御屏風に

つらゆき

やまさとしるひごもかな郭公なきぬこ聞かはつけもくるかに
六帖山里に出づ、三の句うぐひすのこし、結句われにつくべくとせり、亭子院の哥合に作者興風とあり

題しらす

よみ人あらす

山里にやとらさりせはほととぎすきく人もなき音をやなかまし

伊勢集にみゆ、屏風とあり、活字本もおなじ

天曆御時の御屏風に

伊勢

二聲とぎくとはなしにほととぎす夜ふかく目をも覺しつるかな
後撰集に既に出づ、伊勢集に夜更けて時鳥の一聲なき侍りしにと詞がきして載たり

題しらす

よみ人あらす

けふみれは玉の臺もなかりけりあやめの草のいほりのみして

賀茂保憲女集にみゆ

延喜御時中宮歌合に

よみ人あらす

夏くれはふかくさ山のほととぎすなく聲しけくなりまさるかな
寛平中宮歌合初句夏なればとあり、六帖山に出づ、初二句夏衣かたしき

山のごせり

題しらす

ほととぎすなくやさつきの短夜もひとりしぬれは明しかねつも

萬葉集十に出づ、二の句來なく五月のとあり、また赤人集、人丸集にも見ゆ、三十六人撰には作者人丸ごしたり、六帖ひとりねにも同じく見えたり

そと清みなかるゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなん

六帖六月祓に出づ、作者みつねとせり、首句そこみえてとあり、躬恒集もおなじ、活字本三の句早けくもごしたり

もみちせは赤くなりなんをくら山秋まつほとの名にこそありけれ

能宣集夏に、をくらの山をすぎてとあり、後拾遺夏にもいづ、活字本おなじ

秋哥

題しらす

安貴王

秋たちていくかもあらねとこのねぬるあさけの風は袂すゝしも

萬葉集八に出づ、安貴王歌一首とあり、二の句幾日もあらればとせり、敏行朝臣集にもみゆ

題しらす

よみ人志らす

あひみてもあはてもなけく棚機はいつか心のゝとけかるへき

亭子院有心無心歌合に見ゆ、結句べきたらんとしたり

わか祈ることは一つそ天の川そらにしりてもたかへさらなん

契冲河社云、七夕にことをいのるには、ふたつとはいのらぬ習なるを、さしていのることある人のよめるなるべし、本朝文粹第八、小野美材、

七夕代牛女惜曉史應製和歌序終云、臣有一事非富非壽家貧親老庶不官、このときのうたなごにや

齋院屏風に

よみ人志らす

狩にとてくへかりけりや秋の野の花みるほとに日もくれぬへし
題しらす

秋の野の花の名たてにをみなへしかりにのみ來る人にをらるな

續後撰秋上にも出づ、作者伊勢とあり、伊勢集詞書に、女郎花多かる野
に人のかりするにとあり

前栽にすゝむしをはなち侍りて

伊勢

いつこにもくさのまくらを鈴虫はこゝを旅ともおもはさるらん

伊勢集詞書に、鈴虫とりにやりて、前栽の中に放ちたりける夜とありて、
結句思はざらなんとあり、活字本も同じ

二條右大臣粟田の山さとの云々

惠慶法師

いまよりは紅葉のもとにやとりせしをしむに旅の日かすへぬへし

家集、繪にたびゆく人十月ばかりにもみちのもとにやごりたるを、歌、
首句行く末は、結句日數經にけり

延喜御時中宮御屏風に

貫之

ちりぬへき山のもみちを秋霧のやすくも見せすたち隠すらん

つらゆき集九月霧籠山と題して此歌を載たり

大る川に紅葉のなかるゝをみて

壬生忠岑

いろ／＼の木の葉なかるゝ大井川もは桂のもみちこやみん

忠見集に十月大る河のゐせきに紅葉流れたりと題せり、契冲云忠見集詞
書たしかなり、忠岑集にもみえぬは、拾遺をうつす人、ねもじひとつそ
へたるにや

冬哥

題しらす

よみ人あらす

ひねもすに見れともあかぬもみちはゝいかなる山の嵐なるらん

藤原長能集にみゆ、詞書紅葉ちるをみてとありて、首句ひくらしにとし
たり

水鳥のしたやすからぬおもひにはあたりの水もこほらさりけり

六帖鳩に出づ、首句にほごりのとあり

夜を寒み寝さめてきけは鴛鴦をなく拂ひもあへず霜やおくらん

六帖霜月に出づ、首句冬の夜をとせり、金玉集おなじ、後撰冬に既に
出たり

さたふんか家の歌合

霜のうへに降るはつ雪のあさこほりとけすも物をおもふころかな

六帖雪に出でて、下の句さけずもみゆる君がこゝろかとあり

題しらす

橘ゆきより

いけみつや氷とつらんあし鴨の夜ふかくこゑのさわくなるかな

本集一本、二の句氷とくらむとせり、紀友則集にもみゆ、うた本集の如
し、活字本おなじ

よみ人おらす

水のうへにおもひしものを冬の夜のこほりは袖のものにそありける

本集一本、初句水のうへとあり、八代集抄本同じ

屏風に

平 兼 盛

ふしつけし淀のわたりをけさ見ればとけんごもなく氷しにけり

兼盛には見えず、藤原長能集にみゆ

冬さむみこほらぬ水はなけれどもよしのゝ瀧はたゆる世もなし

紀氏新撰に水はチ夜はとし、世もなしチよぞなきとせり

ふゆの池のうへはこほりにとちられていかてか月の底にいららん

是則集腰の句、とちたるをとあり、寛平中宮哥合にも作者是則とありて、
氷にチ氷て、結句いららんチすむらんとせり、新撰萬葉には、腰句とち
つると、結句いりけんさしたり

人 ま ろ

あしひきの山路もおらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれは

萬葉集十七に出でて、下句枝もとを、にとあり、古本家持集にもみゆれ
ご、上句異れば別のなるべし

屏風に

右衛門督公任

梅が枝にふりつむ雪はひとせにふたゝひさける花かとそみる

公忠集にもみゆ、寛平御時の歌合にとあり、後撰集雪をと題せり、六帖
雪に出づ、梅かえにふりおける雪は春ちかみめのうちつけに花かとぞ見
る」とあるうたに似たり

百首うたのなかに

あけゆき

雪つもるおのかとしをはしらすして春をはあすときくそ嬉しき

重之集冬二十首の中に出づ、古本宗于集にもみゆ

賀

題しらす

よみ人あらす

かつみつゝ千年の春はすくすともいつかは花のいろにあくへき

是則集にみゆ、詞書、花をよしむ所にてとあり

享子院哥合に

みつね

三千年になるてふ桃のことしよりはなさく春に遇ひにけるかな

六帖三月三日に出づ、作者忠岑とせり、結句なりそしにけるとあり、享
子院哥合には、歌は本集におなじくて、作者是則とせり、是則集には見
ゆれど、躬恒集にはなし、この歌合に

左勝

みつね

きつゝのみなく鶯のふるさとはちりにしうめの花にそ有ける

右

是則

みちとせに云々

とありて是則朝臣のうたなる事明なりかし

題しらす

よみ人あらす

みなつきの名越のはらひするひとは千年の命のふといふなり

六帖なごしのはらへに出づ、活字本もおなじ

承平四年中宮の賀し侍りける屏風に 参議伊衡

禊しておもふことをそいのりつるやほよろつよは神のまに

六帖夏祓に出でて作者伊勢ごあり、首句みそきつとせり、伊勢集の詞書に、きさいのみやの五十の賀、内にてせさせ給ひしに、御屏風のうたはらへする所」ごありて、首句六帖におなじ

題しらす

よみ人あらず

君か代は天の羽衣まれにきてなつともつきぬいはほなるらん

是則集にみゆ、天徳四年三月卅日内裏歌合、左のすばまのおほひに、あし手を縫ものにしたる中にもこのうたみゆ、新撰朗詠にもよみ人みえず、和歌色葉集もおなじ

別

題しらす

よみ人あらず

櫻花つゆにぬれたるかほみれはなきてわかれし人そこひしき

和歌色葉集おなじ

わするなよわかれちにおふる葛の葉の秋風ふかはいまかへりこん

本集一本、三の句蔦の葉とあり、是則集にみゆ、本集におなじ

さきしもあれ秋しも人のわかるれはいごゝたもとそ露けかりける

拾遺抄に作者貫之とあり

大江爲基あつまへまかりくたりけるにあふきをつかはすとて

赤染衛門

惜むともなきものゆるるゑかすかの渡ときけは音ならぬかな

家集には、上の句をしむべきみかはおもへご」ごありて、詞書、大江爲基みかはになりてくだりしに、あふぎしてやりしに、すばまにかきつけし」とあり

たみのゝしまのほとりにて雨にあひて

つらゆき

雨によりたみの、島にかけゆけと名にはかくれぬ物にそありける

古今集雑上に出づ、詞書、なにはへまかりけるとき、雨にあひてとありて、二三の句たみの、しまをけふゆけばとあり

題しらす

よみ人あらす

きみをのみこひつゝ旅のくさまくらつゆえけからぬ曉そなき

拾遺抄作者右衛門源兼澄女とあり

もろこしにて

柿本人まろ

あまとふや雁のつかひにいつしかもならの都にことつてやらん

萬葉集十五、引津亭船舶泊之歌七首のうちのみゆ、作者たれともなきを、

柿本人麿と定めて茲に出し、そのわき書に、人丸唐事、此哥外無所見、

但上古事唯可任本なごあるは、いかにぞやと覺ゆ

物名

紅梅

よみ人あらす

鶯のすつくる枝を、りつればこをはいかてか生まんとすらん

六帖紅梅に出づ、二の句すつくるすくへるとし、三の句をりつればす

おりたらばとせり

さくら

花の色をあらはにめてはあためきぬいさ暗闇になりてかさ、ん

六帖花に出でて、作者素性とあり、三の句色めきぬ、結句折てとりてん

とせり

ねすみの琴のはらにこをうみたるを すけ見

年をへて君をのみこそねす見つれこと腹にやはこをはらむへき

紀友則集にもみゆ、結句子をばなすべきとあり

雑上

冷泉院の東宮におはしましける時月をまつうたをのことものよみ侍

りけるに

藤原仲文

有明の月の光をまつほとにわかよのいたく更けにけるかな

仲文集詞書に、春宮の藏人所にて明月夜をまつ頃とあり、うた本集のごとし

題しらす

よみ人忘らす

もかり舟いまは渚にきよすなるみきはの鶴もこゑさわくなり

六帖藻に出づ、みきはチあしべ、たづもチたづのとせり、金玉集にもおなじ

うちしのひいさ住の江のわすれくさわすれて人の又やつまむと

六帖忘草に出づ、作者つらゆきさあり、貫之集には下句忘れて人のつまじこそ思ふとみゆ

大江爲基かもごにうりにまうてきたりけるか、みのつ、みたりけるか
みにかきつけて侍りける
よみ人忘らす

けふまでとみるに涙のますか、みなりにしかけを人にかたるな

古今著聞集五に參河守定基、心さしふかゝりける女の、はかなくなりにければ、よをうきものにおもひ入たりけるに、さ月の雨はれやらぬころ、ことよろしき女のいたうやつれたりけるが、かゝみをうりてきたれるをとりにみるに、そのかゝみのつ、みがみにかける「歌云々、これを見るに、なみだとごまらず、かゝみをばかへしとらせて、さまざまにあはれびけり、道心もやおもひさためけるは、このことによれり、出家の後、寂照上人とて入唐しける、清涼山のふもとにて、つひに往生の素懷をこげられけり」とあり、沙石集もおなじ

題しらす

つらゆき

ごしつきは昔にあらすなりゆけと戀しきこはかはらさりけり

貫之集には、上の句年月は昔にあらぬ今日なれごとせり、宗于集にもみゆ、本集に同じ、活字本また然り

中つかさ

うゑてみる草葉そよをはあらせけるおきてはきゆるけさの朝露

小大君集にもみゆ、詞書、よのなかはかなきころせんざいの露をみてとあり、活字本おなじ、中務集には見えず

人丸

かほのせのうつまくみれば玉藻かるちりみたれたる川の舟かも

萬葉集九に出づ、二三の句たぎるをみれば玉もかも、結句この河戸かもとありて、作者間人宿禰とせり、人麿集にも見ゆ

雑下

つのかみに侍ける人のもとにて たゝみ

難波漏ちけりあへるは君か代にあしかるわさをせねはなるへし

忠見集木活兩版共に本集に同じ、古寫本家集上の句、君が代になにはのうらはしげりあひぬとあり

つのかみにまかりけるにしりたる人にあひ侍りて たゝみ

都にはすみわひはてゝ津の國のすみよしとさきく里にこそゆけ

忠見集詞書、京のたよりなかりければ津の國に住まむとて行く道にしりたる人あひて何しにかくはゆくぞと問ひければ」とあり、二の句ありわびぬればとせり

清原もとすけ肥後守に侍ける時云々 よみ人おらす

おごにきくつゝみの瀧をうちみればたゝ山川のなるにそありける

檜垣姫集、重之集にも見ゆ、詞書に大貳つねに歌よませけるつゝみの瀧を」とありてうたは本集に同じ

題しらす

みなそこのわくはかりにやかゝるらんよる人もなきたきの白糸

忠見集にみゆ、詞書、山たかき瀧おつる所とあり、三の句くゝるらんと

せり

廉義公家のかみ繪にたひ人のぬす人にあひたるかたかける所

藤原爲頼

なき名のみたつたの山の麓にはよにもあらしの風もふかなむ

本集一本に、五の句かぜはふくらむとあり、人丸集一本にいりたるはいかゝあらむ

大隅守さくらしまの忠信かくに侍りける時云々

をきな

老はてし雪の山をはいたけと霜とみるにそみはひえにける

うち拾遺物語に、上の句としを經てかいらのゆきはつもれごもとあり

旋頭哥

ますかゝみそこなる影にむかひみて見るさきにこそしらぬ翁に逢ふこゝちすれ

六帖せどうかに出づ、作者みつねとあり

神樂哥

榊葉にゆふしてかけてたかよにか神の御前にいはひそめけん

六帖神樂に出づ、作者つらゆきとありて、二の句ゆふとりしで、腰の

句たれかかくとあり、神樂うた譜、みまへチ御宮とせり

榊葉の香をかくはしみとめくれは八十氏人をまとるせりける

神樂歌賢木に出づ、うた本集におなじ

御幣にならましものをすへ神のみてにとられてなつさはましを

神樂歌幣帛に出づ、本集におなじ

みてくらはわかにはあらず天にますとよをか姫の宮のみてくら

全上に出でて、歌詞おなじ

あふさかをけさこえくれは山人の千年つけとてきれる枝なり

全上杖に出でて、歌詞おなじ

よもやまの人の寶とする弓をかみのみまへにけふたてまつる

全上鉾に出てて歌詞おなじ、腰の句するほこをとし、結句いはひつるか
たとせり

いそのかみふるや少女のたちもかな組の緒して、宮路かよはむ

全上劔に出てて歌詞おなじ

あろかねの目貫のたちをさけはきてならの都をねるはたかこそ

全上に出づ、うた本集に同じ、八代集本五の句ねるや神の子とあり

わか駒ははやくゆかなんあまひこかやへさす岡の玉笹のうへに

神樂うた晝日に出づ、一二の句、いづこにかこまをつながむとあり、六

帖やごりに出づ、一二の句いづこにかやどりとるらんとせり、また四の
句さすやをかへのとしたり

さへはりに衣をすらん雨ふれとうつろひかたしふかく染めては

神樂歌前張に出づ、二の句すらんヲそめんごせり

あなかごりいなふしはらとひわたる鳴のはねかき面白きかな

全上階香殿に出づ、歌本集におなじ

戀哥一

題しらす

よみ人志らす

音にきく人にこゝろをつくは嶺のみねとこひしき君にもあるかな

六帖いひはじむに出でて、下の句みねごも思ふおもはんや君ごあり

みぬ人のこひしきやなそおほつかな誰とかしらん夢に見ゆとも

みつね集にみゆ、活字本おなじ

よそののみ見てやはこひんくれないの末摘花のいろにいてすは

萬葉集十に見ゆ、六帖紅に出づ、二の句みつゝをこひん、結句色にいで

ずともとせり、人麿集は萬葉におなじ、但し結句色に出ぬともとあり

女のもとに男のふみつかはしけるに云々

山彦はきみにもにたる心かなわかてゑせねはおごつれもせず

六帖山彦に出づ、山彦は君にぞあるらし心みにわれさひやめば音づれも
せずとあり

あしひきの山下さよみゆく水のときそともなく戀わたるかな

萬葉集十一、人麿集等に出づ、三十六人集の柿本集には結句戀ふる我身
かとあり

九條右大臣

澤にのみ年は経れともあしたつこのころは雲のうへのみこそ

後撰集に既に出づ、上の句芦鶴の澤へにとしは經ぬれともとせり

よみ人忘らす

おほ空はくもらさりけり神無月しくれこころはわれのみそする

貫之集六に出づ、本集におなじ

よそなからあひみぬ程にこひしなはなにゝかへたる命とかいはむ

天徳四年三月四日内裏歌會に、作者本院侍従とありて、首の二句、人し

れずあふをまつまにこそせり、後拾遺集戀一にも見ゆ、歌は天徳歌合に同
じくて、作者平兼盛としたり

いつともわかこひやまんちはやふる淺間の嶽の煙たゆとも

六帖烟に出で作者なし、續古今集にはつらゆきとあり、貫之集にも見ゆ
みるめかるあまさはなしに君こふるわか衣手はかわくときなき

六帖衣に出づ、初句たまもかる、下句我衣手はかわく夜もなし」とあり、
亭子院哥合もおなじ

逢ふてを月日にそへてまつ時はけふゆくすゑになりねとそ思ふ

貫之集六に出づ、本集おなじ、古寫本けふすまといまとしたり

柿本人麿

三熊野の浦のはまゆふもゝへなるころは思へとたゝにあはぬかも

萬葉集四に出づ、三の句百へなすとあり、兼輔集にもみゆ、三の句も、
かさね、下の句こころはあれどあはぬ君かなとあり、高野文珠院本もお

なじ

志くれにも雨にもあらて君こふるさしのふるにも袖はぬれけり

西宮左大臣集、二の句あめにもあらじ、腰の句いたづらに、下の句年の

ふるにぞ袖はぬれけるとあり

あひみてはしにせぬ身とそなりぬへき頼むるにたにのふる命は

本集一本に、二の句しなれぬ身とぞ、四の句たのむだにすらとあり

人 まろ

こひつゝもけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかくくらさむ

六帖てる日に出づ、三の句あかねさすこあり、萬葉集、赤人集も同じ、

本集一本結句いかで暮さむ、人麿集にもみゆ、初句わびつゝもとせり、

活字本またおなじ

戀哥二

題しらす

よみ人おらす

なき名のみ立田の山のををつゝらまたくる人もみえぬところに

六帖さねかつらに出で、三の句さねかつら、下の句、くる人ありと誰か

いふらんとあり

あちきなやわか名はたちて唐衣身にもならさて巳みぬへきかな

古本人麿集に上の句、あちきなく名をのみたてゝ、結句やまんとや君こ

あり

つらゆき

暁のなからましかはしら露のおきてわひしきわかれせましや

貫之集に、人のもとより歸りて遣しけると詞がきして出づ、このうたの

返しとして、おきてゆく人の心を白露の我こそまづは思ひきゆめれとあ

り、活字本に五句思ひきえぬれとせり

よみ人おらす

獨ねしときはまたれし鶏の音もまれにあふ夜はわひしかりけり

小町集にみゆ、首句ひごりねのとせり、後撰集にはひとりぬる時はまた
るゝとあり

現にも夢にもひごによるしあへはくれゆくはかり嬉しきはなし

六帖雑の思に出づ、みつね集にもみゆ、活字本にはなし

天曆御時哥合

したかふ

こひしきを何につけてか慰めむ夢たにみえずぬる夜なければ

天徳四年三月卅日内裏歌合作者能宣とあり、金玉集にはまたかふとせり、

本集よりとられたるなるべし

題しらす

よみ人あらず

身に戀のあまりにしかは忍ふれと人のしるらんことそわひしき

亭子院歌合にみゆ、作者つらゆきとせり、家集にはなし

人まろ

年をへて思ひくゝてあひぬれは月日のみこそうれしかりけれ

人麿集には見えす、みつね集にみゆ、雑歌三首の一なり、活字本おなじ

よみ人あらず

あきりの晴れぬあしたの天空を見るかことくもみえぬ君かな

みつね集にみゆ、古寫本活字本おなじ

こひわひぬれをたになかん聲たて、いつくなるらん音無しの瀧

六帖里に出でて、結句おとなしの里とあり、四の句いつれなるらんとせ

り

風さむみこゑよわりゆく虫よりもいはて物おもふわれそまされる

忠岑集にみゆ、結句われぞかなしきとあり、類從本活字本共におなじ

あかの海人のつりにともせる漁火のほのかに妹を見るよしもかな

本集戀五にも見ゆ、重出なり、河社に作者坂上郎女とあるは、おぼつか

なきよしいはれたり、一本初句いせのあま、結句人を見るよしもがたと

あり

わひぬれば常はゆゝしき棚機もうらやまれぬるものにそありける

六帖七夕に出づ、作者深養父とあり

露たにもなからましかは秋の夜をたれとおきめて人をまたまし

本集古寫本に、白糸ら露のとたり、紀氏新撰は本集に同じ

いまさらにとふへき人もおもほえす八重葎してかとさせりてへ

古今集雑の下、六帖くれごあはすに出づ、紀氏新撰おなじ

戀三

題しらす

よみ人志らす

あしひきのやました風のさむけきに今宵も亦やわかひとねん

秋萩帖に見ゆ、一二の句、たかやまのたたくさ風も、四の句はたやこよ

ひもごあり、また新勅撰羈旅にもいでて、持統天皇御製とあり、首句み

よし野の、四の句はたやこよひもとあり

あしひきの葛城山にゐるくものたちでもゐても君をこそおもへ

人麿集に秋されば雁飛び越る立田山たちでも居ても君をこそ思へ」とあるに似たり

題しらす

人まろ

長月のありあけのつきのありつゝも君しきまさば我こひめやも

人麿集に出づ、本集におなじ、小町集他本の歌とて載たる中にも見ゆ、

結句まちもこそせめとせり

ぬはたまのいもか黒髪こよひもやわかなき床になひきいてぬらん

萬葉集十一にも見ゆ、三の句こよひもかとあり、六帖髪に出づ、結句靡

きてぬらむとせり

人まろ

現にはあふことかたしたまの夜のたえせず夢に見えなん

貫之集六にもみゆ、四の句よるはたえずもとあり、活字本おなじ

よみ人志らす

あつさゆみ春の荒田をうちかへしおもひやみにし人を戀しき

後撰春中また戀一にも見ゆ、首句このめはる、二の句はるの山田とあり、

六帖春の田に出でて、本集におなじ

いつかたによるとかは見ん青柳のいとさためなき人のこゝろを

素性集にみゆ、二の句よるとか知らんとせり

山邊の赤人

わかせこをならしの岡の呼子鳥きみよひかへせ夜のふけぬとき

赤人集に出づ、結句の時ヲまにとせり、活字本おなじ

たゝくとて宿のつまとをあげたれば人もこすゑの水鶏なりけり

夫木集夏に、神山といふ所にてくるなをと詞書して、作者大僧正行尊、

志ばの戸をたゝくとおもひて明たれば人もこすゑのくるななりけり」と

ある、ひとつうたなるべし

夏衣うすきなからそたのまるゝひとへなるしも身にちかければ

六帖夏衣に出づ、四の句ひとへなるともとせり

水無月のつちさへさけててる日にも我そてひめや妹にあはすして

萬葉集十に出づ、六帖みなつきに見えて作者人丸とせり、人丸集にもみ

ゆ、結句妹にあはずとあり

秋の野のくさ葉もわけぬわか袖の露けくのみもなりまさるかな

貫之集六にみゆ、二の句草もわけぬに、下の句ものおもふなべに露けか

るらんとあり、活字本おなじ

題しらす

赤人

こひしくはかたみにせんごわか宿にうゑし秋萩いまさかりなり

人麿集にも入たり、二三の句かたみにもせよ我せこがとあり、又結句花

さきにけりとあり、活字本は本集の如し、赤人集には見えず

女のもごにつかはしける

よみ人志らす

またもみちするをはしらて松の木のうちへ緑をたのみけるかな

六帖みどりに出づ、二三の句有けるものを松のはのうへは云々とあり
さたふんか家の歌合に

霜のうへにふる初雪のあさこほりとけすも物をおもふころかな

本集冬の部にも出たり、六帖雪に出づ、下の句とけずも見ゆる君が心か」とあり

戀四

題しらす

よみ人あらず

なみまより見ゆるこしまのはまひさきひさしくなりぬ君に逢はず

萬葉集十一に出でて、結句君にあはずしてとあり、六帖ひさ木に出づ、

結句妹にあはずとせり、柿本集、勢語百十六段にも見ゆ

いかほのや伊香保の沼のいかにしてこひしき人をいま一目みん

索性集にみゆ、活字本もおなじ

玉川にさらすてつくりさらくゝにむかしの人のこひしきやなを

萬葉集十四武藏國歌に出づ、下の句なにぞこのころこゝだかなしきとあり、六帖ぬの出でて本集に同じ、夫木抄、袖中抄共おなじ

身ははやく奈良の都になりにしを戀しきことのふりせさるらん

後撰戀に出づ、二の句みやこにチみやこと、結句またもふりぬかとせり

ちりひちの數にもあらぬわれゆゑに思ひわふらん妹か悲しさ

萬葉集十五に出づ、中臣朝臣宅守上道作歌とあり、猿丸大夫集にもみゆ、

詞書におやのせいする女にしものびてもものいふをきよてとりこめていみじ

ういふを聞侍りてとあり、三十六人集の活字本猿丸大夫集には見えず、

この歌袖中抄にも擧たれど、何の集たれのうたともなじ

涙川のとかにたにもなかなむこひしき人のかけや見ゆると

興風集、なみだかはそこはかゞみにきよけれごこひしき人のかけもみえ

ぬは」とある趣あひ似たり

さをしかのつめたにひちぬ山川のあさましきまでごはぬ君かな

六帖山川に出づ、兼盛集に、さゞれ石の上もかくれぬ澤水の淺ましくの
み見ゆる君かな」の趣あり

すみよしの岸におひたる忘草みすやあらましこひはしぬとも

古寫本躬恒集に一二の句ひたすらにわすれもぞする忘草見すやあらまし

戀はしぬとも」とある、甚よく似たり、今本活字本共に見えず

やほかゆく濱のまさこわかこひといつれまされりおきつ島守

紀氏新撰四に出づ、首句なぬかゆく、結句おきつ白なみとあり、和哥色

葉集本集におなじ、土左日記、わがかみのゆきといそへのしらなみと、

いつれまされりおきつしまもり」とあるうたもあれごとこと歌なるべし

葦根はふうきはうへこそつれなけれ下はえならすおもふ心を

六帖うきに出で、本集おなじ

いさや又戀てふ事もしらくにこやそなるらんいこそ寝られね

六帖戀に出でて本集におなじ、一本四の句こやそれならんとあり

たらちねの親のいさめしうた、ねは物おもふ時のわさにぞありける

六帖うた、ねに出でて作者小町とあれど、家集にはなし、伊勢集にもみ

ゆ、活字本には見えず

伊勢

思ひきやあひみぬほと年月をかそふはかりにならんものとは

後撰戀二に出づ、二三の句あひみぬことをいつよりとし、また結句な

さむものとはとして、源信明の歌とす、家集にもみえて、あひみぬほご

をいつよりことせり、伊勢集にもみえたり、二の句あひみぬチあひみる

ごしたり

戀歌五

題しらす

よみ人志らす

いつ方にゆきかくれなむ世の中に身のあれはこそ人もつらけれ

六帖うらみずに出でて本集におなじ、新古今集戀五にも見ゆ

ひたふるにをなは何かはさもあらはあれいきて甲斐なき物思ふ身は
小大君集にみゆ、前のうたの詞書に、女のもとにものをだにいほむこて
きたりける人あしたに「消かへりあるかなきかの我身かなうらみてかへ
る道芝の露」この次に、返し「哀とも草葉の露やとはれまし道の空にて
消なましかば」次におなし人として、此うたを載たり、前のうた消かへ
りは、新古今戀三に作者朝光朝臣とあり、されはこのうたも同じ朝臣の
うたなるべし、三十六人集の小大君集活字本には、二の句死なば中々と
あり

人 麿

こひ死なはこひもしねとや玉ほこの道ゆく人の音つれもなき
萬葉集十一、正述心緒の中に出づ、結句事もつけむとあり
女につかはしける
大中臣能宣
いかてくこふる心をなくさめて後の世までのものはおもはし

能宣集には見えす、後六々撰には輔親卿のうたのうちに出づ

題しらす

よみ人あらす

うしごおもふものから人のこひしきはいつくをしのふ心なるらん
伊勢集に、わびはつる時さへものゝ悲しきはいづくを忍ぶ涙なるらん
ごある歌に似たり

人 まろ

我こそや雲のなかにもおもふらん雨もなみたも降りにくそ降れ

伊勢集にもみゆ、本集におなじ、活字本もまた同じ

坂上郎女

岩根ふみかさなる山はなけれともあはぬ日数をこひやわたらん
人麿集にもみゆ、三の句なけれどちへだてねご、結句こひわるるらん
チこひわたるかもごしたり

藤原有時

なげきこるやまちは人もあらくにわか心のみ常にゆくらん

紀つらゆき集六に、なげきこる山と我身の成ぬれば心のみこそいさなかりけれ」とあるに似たり、活字本もおなじ

題しらす

よみ人あらず

くれなるのやしほの衣かくしあらは思ひそめすそあるへかりける

六帖紅に出づ、本集の如し

ほのかにも我をみしまのあくた火のあくとや人のおとつれもせぬ

伊勢集にみゆ、上の句はつかにも君をみしまのあくた川」とあり、一本下の句、あへとや今にとしたり、活字本おなじ

わたつうみのふかき心はありなから恨みられぬるものにそありける

六帖うらみに出づ、本集におなじ、大和物語には亭子院御歌ごあり

かすならぬみは心たになからなむおもひしらすは恨みさるへく

六帖うらみに出づ、五の句恨みざらまじとせり

こひわひぬ悲しきことも慰めむいつれなかつのはまへなるらん

六帖はまに出づ、本集の如し

かくはかりうしと思ふにこひしきは我さへ心ふたつありけり

伊勢集にみゆ、詞書、むすめのをとこたえにければかはりてよめる」とあり、活字本には、娘の男のたえにけるにつかはしける」と詞書したり我ばかり我をおもはん人もかなさてもやうきと世をこゝろみむ

古今集戀五に出でて作者みつねとあるを、本集によみ人あらずとせられたるは、いかにそや覺ゆる、六帖よりとられたるなるべし、六帖うらみにも出でて作者なし、古今集には首句我ごとくとあり

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひ絶ゆへき

後撰戀二にもよみ人あらずとして出づ

かしまなるつくまの神のつくく」とわか身一つにこひを積つる

新撰萬葉、寛平中宮歌合、等に出たり

雑春

題しらす

凡河内みつね

春たつとおもふころはうれしくていま一年のおいそひける
みつね集には、首句春にあふごありて、結句老ぞそひぬるとあり、活
字本おなじ

桃その、齋院の屏風に

よみ人あらす

うめの花はるよりさきにさきしかと見る人まれに雪のふりつゝ
家持集に出づ、結句雪のふれはとしたり
人にもものいふときととはさりける男のもとに

中宮内侍

春日野の萩のやけ原あさるこも見えぬなき名をおほすなるかな
馬内侍集に、殿上にてなき名をいひたりければ、もえこがれ萩のやけの
くゆるうへにみえぬなき名をおほすなるかなとあり

題しらす

よみ人あらす

咲きしどきなほこそ見しか桃の花ちれはをしくそ思ひなりぬる
近江御息所歌合にみえて、うた本集におなじ
はる風は花のなきまに吹きはてぬさきは思ひなくて見るへく

六帖春風に出づ、本集におなじ

京極の御息所春日にまうて侍りける時國司のたてまつりけるうたあま
た有ける中に
藤原忠房朝臣

はるかすみ春日の野邊にたちわたりみちても見ゆる都人かな
みつね集にもみゆ、詞書に、法皇六條の御息所春日にまうづる時に、大
和守忠房朝臣あひかたらひて、此國の名所の和歌八首をよむべきよし、
かたらふによりて、六首おくる、其時延喜廿一年二月七日とあるを按ふ
に、これはうづなくみつねぬしのうたなり、みつね集に、このうたと
もに、六首書たるうちに、「ふるさとのかすがのべのくさもきもふたゝ

び春にあふこともがな」とあるうたを、新千載神祇に作者みつねといたしたり、また「としごこにわかになつみつるかすがの、野もりもけふや春をしるらん」とあるを、續後撰雜上にも作者みつねとしていだされたり、かれこれ合せ考ふれば、思ひなかばにすぎぬべし

題しらす

よみ人あらす

さくら花みかさの山のかけしあれば雪こふれともぬれしとそおもふ

紀氏新撰春に出づ、下の句雪とふるともいかにぬれめやとあり

ひえのやまにすみ侍りけるころ人のたきものをこひて侍りければ云々

如覽法師

春すきてちりはてにける梅のはなたゝ香はかりそえたに残れる

高光集にもみゆ、詞書も歌も本集におなじ、また小大君集に、詞書、たうのみねにある大徳の舍利會のかうろにいれむ梅の花、方さふらふなる、あはしたまはらんと申したりければ」とありて、上の句、春風にちりは

てにけん梅の花たゝ香はかりぞ枝に残れる」と見ゆ、なほ委しく探ねまほし

左大臣のむすめの中宮のれうにてうし侍ける屏風に

よみ人あらす

むらさきの色しこければ藤のはな松のみとりもうつろひにけり

みつね集にみゆ、本集におなじ

題しらす

人まろ

ほとゝきすかよふ垣根の卯の花のうきこゝあれや君かきまさぬ

人麿集にも赤人集にもみゆ、活字本も共に本集におなじ、本集一本、初句鶯のとあり

雑秋

題しらす

人まろ

わたしもり舟はやわたせ一年にふたゝひきます君ならなくに

人麿集は本集に同じ、赤人集にもみゆ、きます君チかよふ道とせり、活字本もおなじ、本集一本に二の句舟はやくくせ、また早舟よせよなどもあり

よみ人志らす

よをうみて我かす糸はたなはたのなみたの玉の緒とやなるらん

貫之集三にみゆ、活字本結句緒にやならましとあり

天祿四年五月廿一日圓融院のみかと一品にわたらせ給てらんことらせ給けるにまけわさを七月七日にかの宮より内の大はん所にたてまつられける扇にはられて侍けるうすものにおりつけて侍ける

元 輔

天の川あふきの風にきりはれて空すみわたるかさゝきのはし

元輔集おなじ、圓融院扇合には、作者中務とあり、家集には見えす

題しらす

よみ人志らす

むつまじきいもせの山としらねはやは秋霧のたちへたつらん

曾根好忠集にみゆ、古寫本には四の句夕ある雲のとあり

天曆御屏風に

藻鹽やく煙になるゝすまのあまはあきたつ霧もわかすやあるらん

中務集に須磨の題にてみゆ、本集におなじ、一本なるゝチなれし、有らんチ有けんとあり

あきの野の花のいろくとりすへて我ころもてに移してしかな

躬恒集にみゆ、本集におなじ、活字本二の句花の八千くさこあり

中宮のうちにおはしましける時月のあかき夜云々

善滋爲政

九重のうちたにあかき月かけにあれたる宿をおもひやるかな

公任卿後十五番哥合に、結句おもひ社やれとあり、本集一本にも然見ゆ、

延喜十九年九月十三日御屏風に云々

よみ人志らす

もよしきの大宮なからやそしまを見るこちする秋の夜の月

六帖秋月に出でて作者みつねとあり、家集にもみえたり、詞書に、清涼殿の南のつまにみかは水ながれいでたり、その前裁にさくら川あり、延喜十九年九月十三日に賀せしめ給ふ題に、月にのりてさくらみづを玩ぶ詩歌心にまかす」とあり

題しらす

よみ人あらす

かのみゆるいけへにたてるそかきくのあけみさ枝の色のてこらさ

色葉集に出づ、うた本集の如し、石見女和歌式に、春のくる道こそはゆれ春日山峰の榊の色のてこらさ」とありて、てこらさは色のつや濃き意の詞なり、類少き詞なれば茲に引注す

人 丸

わきもこか赤裳濡してうゑし田をかりてをさめむくらなしの濱

萬葉集九に出づ、二の句あかも泥塗而とあり、人麿集にも見えて本集に

おなじ

延喜御時月次御屏風のうた

み つ ね

菊りてほす山田の稻をほしわひてまもるかりほに幾夜へぬらん

躬恒集上の句、みやまたのおくてのいねをかりほして、結句いくよへぬらしとあり

題しらす

よみ人あらす

久方の月をさやけみもみち葉の濃さも薄さもわきつへらなり

みつね集にみえて本集におなじ

あらなみは故郷なれやもみち葉の錦を着つたちかへるらん

つらゆき集二にみゆ、本集におなじ、古寫本首句しらなみの、四の句に

しきおりつよごあり

はふりこかいはふ社のもみち葉も注連をはこえてちるといふ者を

萬葉集十に出づ、六帖の社にも出づ、作者人麿とあり、柿本集にもみゆ、

六帖上句いがきして守る社のもみち葉も」こせり

雑賀

五月五日ちひさきかさりちまきを云々

春宮大夫道綱母

こゝろさしふかきみきはにかるこもは千年のさつきいつか忘れん

源順集にもみえて、五日菖蒲につけてある所にたてまつらせける、進上

(こゝろさし)深(ふかき)右葉之菖蒲草(あやめくさ)千年五月五日可茹

(千とせのさつきいつか)と書けり

つくしへまかりけるときにかまと山のもとにやとりて侍けるにみちつ

らに侍ける木にふるくかきつけて侍ける

はるはもえあきはこかる、かまとやま

もとすけ

かすみもきりもけふりとそみる

重之集にも見えて、下の句煙たえぬや紅葉なるらむ」こあり、活字本おなじ

題しらす

よみ人おらす

はなの木は籬ちかくはうゑて見しうつろふいろに人ならひけり

古今集春下に見ゆ、上の句花の木はいまはほりうゑじ春たてば」とあり、

新撰萬葉、また六帖花にも出づ、作者素性とせり、上の句花の木もいま

はほりうゑじあちきなく」とあり

いかてかはたつねきつらんよもきふの人もかよはぬわか宿の道

高光集にみゆ、詞書、たうのみねに住ころ人のとふらひたる返事にとあ

り、本集一本には、初句いかでかくとせり

雑戀

題しらす

よみ人おらす

いつしかもつくまの祭とくせなむつれなき人のなへの數みん

勢語百二十段に出づ、首句あふみなるとあり

久しうまうてこさりけるをこの云々

過ちのあるかなきかをあらぬ身はいとふに似たる心地こそすれ

兼輔集にみゆ、詞書、つねにあひしりたりける女のいかゞありけんふすべければとありて、首句あづまぢの、腰の句しらぬまは、結句ものによ有けるとせり、活字本おなじ、あづまぢのは、あやまぢの誤より來れるなるべし

題しらす

世の中はいさともいさや風の音はあきにあきそふこ、ちこそすれ

後撰雜四に伊勢の歌として出たり、本集一本に初句世の中をとせり

風はやみ峰のくす葉のこもすればあやかりやすき人のこゝろか

六帖葛に出づ、人ヲ君としたり

もとよしのみこ久しうまからさりける女のもとに云々

思ひいて、とふにはあらず秋はつるいろのかきりを見するなりけり
後撰秋の下にも出づ、うた本集の如し

哀傷

つまのなくなりて侍けるころ云々

大貳國章

おもひきや秋の夜風のさむけきいもなき床にひとりねんとは

元輔集にみえたり、詞書に、大貳くにのり、秋風によさむなるよしよみて侍りし返事につかはすとあり、されは元輔朝臣のなることいちじるし、こゝに大貳國のりとあるはまたくあやまれるなり、なほ後拾遺集雜一にも此のうた入りて、そこには作者清原元輔とあるをや
つまにまかりおくれて又のこしの秋云々

人まろ

こそみてし秋の月夜はてらせともあひみし妹はいやとほさかる

萬葉集二に出づ、三の句てらせれど、結句いや年さかるとあり、人麿集

には三の句宿れどもこせり、活字本同じ、六帖哀にも家持集にもみゆ、本集の如し

ふくぬき侍るとて

よみ人志らす

ふち衣はらへてすつるなみた川きしにもまさる水そなかるゝ

金玉集作者人のとのゝ母とあり、二三の句ながすをみたの川みづは、結句ものにぞ有けるとあり

ふちころもはつるゝ糸は君こふるなみたの玉の緒とやなるらん

六帖哀に出づ、三の句わびゝとの、結句緒とぞなりけるこありて、作者たゞみねとせり、忠岑集にも、貫之集にもみゆ、詞書、おやのおもひに侍ける時よみけるこあり、忠岑集も共に腰の句六帖におなじ、忠みね集結句緒とぞなりぬるとせり

墨染のころものそては雲なれやなみたの雨のたえすふるらん

六帖哀に出づ、また忠岑集にもみゆ、詞書に、いみにこもりたる人をと

ふとてこありて、二の句君がころもは、下の句、たえす涙の雨とふるらむ」とせり、活字本おなじ

昔見侍りし人々おほくなくなりたるこそをなけくをみて

藤原為頼

世の中にあらましかはこおもふ人なきか多くもなりにけるかな

返し 右衛門督公任

常ならぬ世はうきみこそ悲しけれその數にたにいらしとおもへは

為頼朝臣集にもこの贈答見ゆ、うた共に本集の如し

題しらす よみ人志らす

うつくしこおもひし妹を夢にみておきてさくるになきを悲しき

萬葉集十二正述心緒歌に見ゆ、一二の句愛等思吾妹乎、結句無之不怜とあり

子におくれてよみ侍ける

平兼盛

弱竹のわか子のよをはしらすしておほしたてつと思ひけるかな

重之集に、みちのくにて子のかくれたるに詞書せし五首中にもみゆ、
又祭主輔親卿集にも作者の名はなくて、此うたをいたして、かへし「竹
の子のおひまさるべきよをすて、ときはならずもかれにけるかな」輔親
ごあり、兼盛集には見えず

子ふたり侍ける人のひごりは春まかり云々

よみ人あらず

春ははな秋はもみちごちりはて、立隠るへきこのもごもなし

伊勢集にみゆ、詞書、春秋子をなくなしておもひなげきてとあり

題しらす

よみ人あらず

よのなかをかくいひく／＼てはて／＼はいかにやいかにならんとすらん

本集の雑中にも出づ

山寺のいりあひの鐘のこゑことにけふもくれぬと聞くそかなしき

玄々集に作者みあれの宣旨とありて、山てらチみてらとしたり

性空上人のもとによみてつかはしける

雅致女式部

くらきよりくらき道にそいりぬへきはるかにてらせ山の端の月

和泉式部集にみゆ、詞書、はりまのひじりのおもごにけちゑんのため
きこえしとあり

撰集考異第四

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

後拾遺和歌集

春上

としこもりに山寺に侍りけるに云々 大中臣能宣朝臣

人しれすいりぬさおもひしかひもなく年も山路をこゆるなりけり

能宣集には、人知れず入りきと思ひし甲斐もなくとしも越來る山路なり
けり」とあり、活字本おなじ

入道前太政大臣云々おなじ屏風に大饗のうたかきたる所云々

入道前太政大臣

きみませとやりつる使きにけらし野邊の雉子はとりやしつらん

榮花物語ゆふしでに出づ、作者藤原道長、初句君がりとあり
正月二日あふさかにて鶯のこゑをきゝて

源 兼隆

故郷へゆく人あらはことつけむけふうくすのはつ音聞つと

惠慶法師集にみゆ、詞書、二月二日あふさかこゆるほとに、うぐひすの
こゑをきく」とあり

長久二年弘徽殿女御歌合し侍けるに春駒をよめる

源 兼長

かちはなれさはへにある、春駒はおのかかけをや友と見るらん

長久二年弘徽殿女御十番歌合今の本作者しけながとせり

題しらす 和泉式部

秋までの命もしらすはるの野に萩のふるえをやくごきくかな

和泉式部集結句やくとやくかなとあり、活字本は本集におなじ

後冷泉院御時后宮の歌合に殘雪をよめる

藤原範永朝臣

花ならてをらまほしきはなにはえの蘆の若葉にふれるしら雪

天喜四年四月卅日皇后宮春秋歌合に、作者但馬とあり

春下

天曆御時の屏風に桃の花ありける云々

清原 元輔

あかさらは千代までかさせ桃の花はなもかはらし春もたえねは

範永本中務集に、「かくてなほちよまでかさせ梅のはな、花もかはらでち
よもたえずば」とある歌に似たり

天徳四年哥合に 平 兼盛

百年に散らすもあらなむさくらはなあかぬ心はいつかたゆへき

天徳四年三月卅日内裏歌合、作者元輔、初句よとよもにとあり、元眞集

にもみゆ、初句内裏歌合におなじ

題しらす

中納言定頼

としをへて花に心をくたくかなをしむにとまる春はをけれと

二條太皇太后宮大貳集にもみゆ、三の句くたくなりとあり

夏

題しらす

よみ人老らす

月影をいろにてさける卯の花はあけはありあけのこゝちこそすれ

檜垣姫集に、「月かけを色にてさけるさくらばな雲がくれなほ散ぬとやい

はむ」とある歌を、卯の花によみかへたるにやあらむかし

宇治前太政大臣卅講の後歌合し侍けるに郭公をよめる

赤染衛門

なかに夜もなく夜もさらす郭公まつとてやすくいやは寝らるゝ

夜もすから待ちつるものを郭公またゝになかて過ぎぬなるかな

賀陽院水閣歌合に、この二首左の如く見ゆ

左

茂忠朝臣

なかに夜もなく夜もさらす郭公まつとてやすくいやはねらるゝ

右

衛門

よもすがらまちつるものを郭公またもなかて過ぎぬなるかな

榮花物語哥合には赤染とせり共に赤染衛門の略記ならむ、また左作者義

忠とも茂忠ともあり、茂義字體のよく似たるより、何れかあやまりたる

なるべし

さなへをよめる

そねのよしたゝ

みたやもりけふは五月になりけり急げや早苗おひもこそすれ

左京太夫顯輔集「色ふかく門田のさなへなりけりいそげやしつをふし

もこそたて」とあるうたといとよく似たり

宇治前太政大臣家に云々

民部卿長家

夏の夜もすゝしかりけり月かけは庭しろたへに霜とみえつゝ

榮花物語哥合には、作者四位少將行經とあり

秋上

土御門右大臣家に歌合し侍けるに秋日を

源爲善朝臣

おほそらの月のひかりしあかければまきの板戸も秋はさゝれす

長暦二年九月十三日源(師房)大納言家歌合に、二の句月のひかりの、結句さゝれざりけりごあり

寛和元年八月十日内裏哥合云々

藤原長能

いつも見る月そとおもへと秋の夜はいかなる影をそふるなるらん

公任卿集にみゆ、二の句おもへとち思ふにしたり、さて此歌の前に、「秋の夜の月にこゝろのあくかれて雲ぬにものおもふころかな(詞花秋花山院御製)」とあるうたの次にいたして、前のうたの詞書に、花山院の

歌合のやうなることせさせ給ひけるに、月を御とあれば、此いつもみる云々も御製にはあらじか、いかゞあらむかし

寛和元年八月十日内裏歌合

藤原長能

わきもこかけてまつらん玉章をかきつらねたる初雁のこゑ

公任卿集にもみゆ、詞書、たかだにてとありて、下の句かきつゞけたる雁がねのこゑとあり、活字本も同じ

天曆御時の御屏風に云々

清原元輔

あきの野にかりそくれぬる女郎花こよひはかりは宿もかさなん

貫之集一にもみゆ、小鷹狩の歌なり、活字本おなじ

土御門右大臣家に歌合し侍けるに云々

よみ人志らす

萩の葉をふきすきてゆく秋風のまたたか里におとろかすらん

長暦二年九月十三日源大納言家歌合に、二の句ふきわけて、四の句又たかさをとあり、本集或本初句萩の葉にとせり

秋下

中納言定頼かれくになり侍けるに云々

大貳三位

つらからんかたこそあらめ君ならて誰にか見せんしら菊の花

定頼朝臣集に、詞書、ちこの辨にかれくになり給ひけるころ、菊の花をりてたてまつるこて、つらからん云々返し、「初霜にまがふ籬の白菊をうつろふ色とおもひをすらん」とあり

藤原義忠朝臣

紫にやしほそめたる菊のはなうつろふいろとたれかいひけん

上東門院菊合和歌に作者しらず、初句こむらさき、結句たれかみざらんとあり、同じ歌なるべし

清原元輔

天曆御時御屏風に云々

うすくこくいろを見えけるきくの花露やこころをわきて置くらん

紀貫之集四にもみゆ、歌本集の如し、活字本おなじ

冬

十月のついたちにうへのをのことも云々

前大納言公任

おちつもる紅葉を見れば大井川みせきに秋もとまるなりけり

公任卿集に、下句みせきにさまる秋にぞあけるとあり

賀

題しらす

よみ人志らす

君か代はかきりもあらし濱椿ふたゝひいろはあらたまるとも

或人云この歌七夜に中納言定頼がよめる

正治二年御百首に、二の句かぎりもしらず、下句ふたゝび色のかはるのみかはとありて、作者神主康業王とあり

宇治前太政大臣の家に卅講の後歌合云々 藤原爲盛女

おもひやれ八十氏人の君かためひとつころに祈るいのりを

榮花物語哥合に作者すけふさの少將とあり、一本に伊勢大輔とあり

別

祭主輔親るなかへまかりくらんとしけるに云々

惠慶法師

もみち見んのこりの秋もすくなきに君なかるせは誰とまらまし

祭主輔親集に載たるは、初句もみちばも、三の句すくなきをとり、

源頼清朝臣みちのくにの守はて、又紀俊高に云々

さかみ

たひくの千代をはるかに君や經んすゑのまつよりいきの松原

相摸集に、上の句たひくに君が千とせやまさるらんとあり、また本集

一本には、五の句いきの松までとし、本集古寫本には三の句君や見むと

せり

羈旅

つくしにくたり侍けるにあかしといふところにて云々

前内大臣

ものおもふ心の闇しくられはあかしの浦もかひなかりけり

榮花浦々のわかれに出づ、作者藤原伊周、二の句ころのうちしとあり

いつものくに、なかされ侍りけるみちにて

中納言隆家

さもこそは都のほかにやとりせめうたて露けきくさまくらかな

榮花浦々のわかれに出づ、三の句たびねせめとあり

哀傷

ものいひ侍りける女のほともなくみまかりければ云々

藤原實方朝臣

契ありてこの世にまたもうまるこも面かはりして身をやわすれん

惠慶法師集にも、詞書、をけゆき子におくれてかなしふときよてつかはす「契あらはまたは此世にうまるとも面變りしてみもわすれなん」とあり

戀一

文つかはしける女の返事せさりければ

祭主輔親

みつ汐のひるまたになき浦なれやかよふ千鳥の跡も見えぬは

家集にも出づ、また人のもとにふみやる返事せねは「よごよもになみし

あらへはすまのうらにかよふ千とりのあともみえぬる」といふ歌もあり

宇治前太政大臣家の卅講の後のうた合に

堀川右大臣

あふまでとせめて命のをしければこひこそ人のいのちなりけれ

榮花哥合に作者春宮大夫頼宗とありて、結句いのりなりけれとあり

題しらす

大中臣能宣朝臣

戀く〜てあふとも夢に見つる夜はいと〜寢覺を佗しかりける

能宣朝臣集には、下句いと〜ねざめのうらめしきかな」とあり

女のもとにつかはしける

西宮前左大臣

さりごもおもふ心にひかされていま〜て世にもふる我身かな

敦忠朝臣集に、詞書、齋宮よをへて聞えかはし給ひけるはしめのにや」

とありて、贈答のうた十三首あるかなかにみゆ、三の句はかられて、下

の句よにもけふまでいけるいのちか」とあり

返し

小野宮太政大臣女

頼むるに命の〜ふるものならば千年もかくてあらんとやおもふ

敦忠朝臣集に上の句たのむにもいのちのかゝるものならば、結句とぞお

もふとあり

題しらす

平 兼盛

人しれすあふをまつまにこひ死なはなにかへたる命とかいはむ

天徳四年三月卅日内裏歌合に、作者本院侍従とあり

戀二

中の關白少將に侍りける時はらからなる人にもいひわたりけりた
のめてこさりけるつとめて女にかはりて

赤染衛門

やすらはてねなましものを小夜ふけて傾くまでの月を見しかな

馬内侍集にもみゆ、こよひかならすこんとて、こぬ人のもとに」と題書
したり

輔親ものいひ侍ける女のもとに云々 　よみ人ゑらす

わすらるゝ身をしる雨はふらねごも袖はかりこそ乾かさりけれ

祭主輔親卿集に、こいへるにわすれぬにかくいへるとて」と題書して、

「我ためにかけてぬれけん衣手はわすれぬ人をうらみてかせし」なごあり

清少納言人にゑらせて云々 　藤原實方朝臣

わすれすよまたかはらすよ瓦屋のゑたゝく煙りしたむせひつゝ

藤原長能朝臣集にもみゆ、上の句、我こゝろかはらんものか云々とせり

戀三

陽明門院皇后のみやと申ける時云々 　後朱雀院御製

菖蒲草かけたもこの根をたえてさらに戀路に迷ふころかな

榮花くれまつほしに見ゆ、上の句、もろともにかけしあやめをひきわか
れ」とあり

題しらす 　いつみしきふ

うき世をもまた誰にかは慰めんおもひしらすもこはぬ君かな

相模集にもみゆ、二の句、たればかりにかごあり

戀四

承暦二年内裏歌合に 　辨乳母

こひすとも涙の色のなかりせは志はしは人にしられさらまし

讚岐入道(藤原顯綱朝臣)集にもみゆ、女御殿女房内裏にてご題書せり

題しらす

藤原長能

かそふれは空なる星もしるものを何をつらさのかすにこらまし
家集に三の句なにならずごせり

和泉式部

涙川おなし身よりはなかるれとこひをは消たぬものにそありける
在民部卿家歌合あはぬ戀に、「あひかたみめよりなみだはながるれどこひ
をばけたぬものにぞ有ける」とあるによられたるにや

雑二

十月はかりまてきたりける人の時雨し侍りければ云々

馬内侍

かきくもれ時雨とならしかみなつき心そらなる人やごまるご
今ものかたりに、作者の名はなくて、上の句ふれやあめ雲のかよひぢみ

えぬまで云々の歌あり

題しらす

藤原元眞

うきこともまたしらくもの山の端にかゝるやつらき心なるらん
元眞集にも出づ、うた本集の如し、敦忠卿集には、このうたの初句ヲ世
のなかもとし、下句ヲかゝるや人のつらきなるらむとしたる歌あり、詞
書に、はじめの北のうらみきこえてとせり

右大將朝光かよひはへりける女に云々 よみ人あらず

ねぬのはねぬなはいたく立ぬれとなほ大澤のいけらしやよに
朝光卿集に、詞書、さきくかよひたまふ女、あまたなること人にいは
るゝこそうけれとのたまひければ女ごしてこの歌見ゆ

雑三

よの中をうらみてこもりおて侍りける頃八重菊を云々

前大納言公任

おしなへてさく白菊はやへくのはなの霜とそみえわたりける
家集に、二の句、ひらくるきくはごせり

雑四

右大將濟時住吉にまうて侍ける云々 藤原爲長

まつみれはたちうきものを住の江のいかなるなみかまつ心なき

小大君集にもみゆ、二の句こがれぬものをとせり

上東門院住吉にまゐらせ給ひて云々 上東門院新宰相

都いて、秋よりふゆになりぬればひさしき旅のこちこそすれ

榮花物語殿上の花見に見えて、作者伊勢大輔とあり

雑五

中納言實成宰相にて五節たてまつりける云々

よみ人志らす

多かりしとよの宮人さしわけてあるき日かけをあはれとそみし

紫式部集にみゆ、詞書、侍従の宰相の五節のつばね、みやのおまへはい
とけちかきに、弘徽殿の右京がひとよしるきさまにてありしことなど、
人さしひ出て、ひかげをやるとしまきはすべきあふきなごそへて」と
あり

一條院の御時皇后宮五節たてまつりたまひける云々

藤原實方朝臣

あしひきの山ゐの水は氷れるをいかなるひものこくるなるらん

家集詞書、新嘗會のよあかひのみだるゝと、のぶかたの中將うれふれ
は「いかなるみづのよそにとくらん」のぶかた、「あしひきの山ゐの水は
さえながら」とありて、もと連歌なりしなるべし

一條院御時大貳佐理つくしに侍けるに云々

源 重之

都へといきのまつはらいきかへり君か千年にあはんとすらん

重之集結句、あはんとぞおもふとせり

かたらふ人のもとに年頃ありて云々 よみ人あらず

すきもすき宿もむかしのやとなからかはるは人の心なりけり

日本風土記に、題を歸遲嘆世とおきて、紫氣木紫氣耶多木木革失那耶陀
乃而尼革外而外許多那箇々路乃里計里と書けり

神祇

大貳成章肥後守にて侍ける時云々 よみ人あらず

天の下はくゝむ神のみそなればゆたけにそたつみつのひろまへ

色葉和歌集に出づ、本集に同じ

撰集考異第五

金葉和歌集

春哥

霞のこゝろをよめる 大宰大貳長實

あつさゆみ春のけしきになりにけりいるさの山に霞たなひく

曾丹集に、梓弓春のかすみはへたつれごいるさの山のつきぞさやけき
とあるによれるにや

夏哥

承暦二年内裏哥合に郭公を人にかはりてよめる

藤原孝善

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

ほととぎす心も空にあくかれてよかれかちなるみやまへの里
左京太夫顯輔卿にかはりてなるべし、顯輔卿集にもいりたり

秋哥

後冷泉院御時皇后宮哥合に云々

藤原隆經

ひく駒のかすよりほかに見えつるは關の清水のかけにそありける

天喜四年四月卅日皇后宮春秋歌合に、作者下野とあり

宇治入道前太政大臣の三十講の歌合に

よみ人あらす

やとからそ月の光もまさりける夜のくもりなくすめはなりけり

長元八年五月十六日賀陽院水閣歌合に、作者衛門とせり、榮花物語の歌

合には、赤染衛門とあり

賀哥

天喜四年皇后宮の哥合に祝の心をよませ給ける

後冷泉院御製

長濱のまさこの數もなにならすつきせす見ゆる君か御代かな

詞花集の賀にも御製とせり、歌合流布の本には、作者源三位俊賢とあり

別離哥

題しらす

よみ人あらす

おくれるて我こひをれば白雲のたなひく山をけふやこゆらん

萬葉集九に出づ、結句今日かこゆらむとあり、家持集二三の句、あれば

やこひの春霞、結句きみがこえぬるとあるは、やゝ似寄れるのみにて別

のにやあらむ

戀哥上下

人のもとよりせめて袖ぬらすまをみせばやななといはせたりければ

よめる

皇后宮少將

恨むともみるめもあらしものゆゑに何かは海人の袖ぬらすらん

堀川院艶書合に、ながれ出る雫に袖はくちはてゝをさふるかたもなきそ

かなしき 權中納言國信

返し

おく網のうけもひかれぬものゆゑに何かは海人の袖のくつらん 作者女
御殿ゆり花とあり

題しらす

よみ人志らす

あふこなきものとしるく何にかは歎きを山とこりそつむらん

待賢門院堀川集に、あふこなきなげきのつもるくるしさをおへかし人の
こりはつるまで」とあるにいとよく似たり

かしかましやまのしたゆくさゝれ水あなかまわれもおもふ心あり

六帖、水に出づ、伊勢集にも見ゆ、さもに初句おとなしのとありて、結
句家集には、おもふころかなさあり

寄夢戀をよめる

源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひ見てもなほ夢かとそなたかはれける

本集戀上に、この歌出でたるを、またこゝにも入りたるは、いとく杜
撰なり

雑上

後三條院かくれさせおはしましてのち云々

右近將曹秦兼方

こそ見しに色もかはらすさきにけり花こそ物はおもはさりけり

今ものがたりに云、後拾遺をえらはれける時、秦兼方といひける隨身、
このうたをよみて、えらふ人のもさに行て、このうた入んとのそみける
に、花こそといへるが、いぬの名に似たると難じけるをきゝて、たちさ
まに、此殿は勅撰なごうけたまはるべき人にてはおはせざりけるものを、
花こそ宿のあるしなりけれといふ歌もあるはこいひかけてける、いとほ
したなかりけり」とあり、春部按に、花こそ宿のあることある歌は、拾
遺集雑春公任卿のうたなり、また古今集になりひら朝臣、うゑしうゑは

秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや」といふ歌を、おもひ出られさりはくちをし

題しらす

よみ人志らす

身のうさをおもひしとけは冬の夜もとこほらぬは涙なりけり

鳴長明無名抄云、このうたは、仁和寺の淡路阿闍梨とかいひける人のいもうとのもごなりけるなま女房の、いたくよをわびてよみたりける歌なりさなむ、春部按に、和泉式部集に雪のふるひ「身にしみてものかなしき雪けにもとこほらぬはなみたなりけり」とあるうたあり、ひとつうたにはあらざんめれど、いとよく似たるうたなり

皇后宮弘徽殿におはしましけるひ云々

皇后宮大貳

石たゝみありけるものを君にまたあくものなしと思ひけるかな

中納言雅兼卿集に、苔上落花と題して、こけむしろありけるものを散る

花にしくものなしとおもひけるかな」とあるより思ひよれるにや

撰集考異第六

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

詞花和歌集

春

冷泉院春宮と申ける時云々

源重之

かすか野にあさなく雉子のはねおとは雪のきえ間に若菜つめとや
重之集に二の句あさたつきじのとあり

夏

贈左大臣の家に歌合し侍けるによめる

修理大夫顯季

たねまきしわか撫子の花さかりいくあさつゆのおきてみつらん

顯季集に、菊の花さきぬる時は目かれせばいく朝露のおきてみつらん」とあり

六條右大臣家に歌合し侍けるによめる

よみ人志らす

さつきやみ鶺鴒川にともすかゝり火の數ますものは螢なりけり

藤原光經集に、江螢と題して、さつきやみくだす鶺鴒ふねのかゝり火に入

江のほたるかずまさるなり」とあるに似たり

冬

題しらす

よみ人志らす

秋はなほこのしたかけもくらかりき月は冬こそ見るへかりけれ

後葉和歌集にもおなじ歌見ゆ

賀

あるひとの子三人にかゝふりせさせたりけるにまたのひつかはしけ

る

きよはらもこすけ

松島の磯にむれある葦田鶴のおのかさまく見えし千代かな

重之集にもみゆ、詞書、むねたゝがみちのくにゝて子ども三たりがかう

ぶりし侍りけるまたのあした」とあり

後三條院のすみよしまうてによめる 　よみ人志らす

きみか代のひさしかるへきためしにや神もうゑけむ住吉の松

榮花物語松のしつえに見ゆ、活字本三の句ためしにと、せり

戀上

題しらす

よみ人志らす

年をへてもゆてふ富士の山よりもあはぬおもひは我そまされる

寛平御時后宮歌合、新勅撰集戀二、後葉和歌集などに見え、いづれも本

集に同じ

わひぬれはちひてわすれんごおもへとも心よはくもおつる涙か

寛平御時后宮歌合に、作者菅野たゝおむごして、上の句つれなきをいまは戀しとおもへともごあり、古今集戀五、新撰萬葉集もおなじ、後葉和歌集戀二にもいりたり、歌本集におなじ

おもはしごおもへはいと、戀しきはいつれかわれか心なるらん

後葉和歌集戀二おなじ、本集一本四の句何れかおのがとあり

冷泉院春宮と申けるととき云々 源 重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物をおもふころかな

家集も本集に同じ、ある一本にさ夜更けて岩うつ波ごあり

中納言としたゝか家の歌合によめる 藤原顯綱朝臣

くれなるのこそめの衣うへにきんこひの涙のいろかくるやご

家集にも出づ、三の句したにきん、結句色かへるやとせり

題しらす よみ人あらす

わか戀はふたみかはれる玉匣いかにすれとも逢ふかたそなき

本集一本に二の句、ふたみ變りし玉匣とあり、後葉和歌集戀二にも出づ、うた本集に同じ

戀下

題しらす

よみ人あらす

つらしとて我さへ人をわすれなはさりさて中のたえやはつへき

後葉和歌集戀四に出づ、うた本集に同じ

中納言通俊たえ侍ければ云々

さりとは誰にかいはんいまはたゝ人を忘るゝことを教へよ

後葉和歌集戀四に出づ、うた本集に同じ

題しらす

忘らゝ人目はかりをなけきにて戀しきことのなからましかは

後葉和歌集戀四に出づ、うた本集におなじ

雑上

よにしつみて侍りけるころ云々

左京大夫顯輔

かれはつる藤のすゑはのかなしきはたゞ春の日をたのむはかりそ

台記、久安六年十二月四日丙午の條に、去十月十三日、攝政欲加息童元服自八月企此事饗祿充諸國而依長者停止世人咲之攝政聞之詠歌曰「カレハツルフヂノ末葉ノナゲキチバタバハルノヒニマカセテゾミル」とあり

雑下

はりまに侍ける時月をみてよめる

師前内大臣

都にてなかめし月をみるときはたひの空もおほえさりけり

和泉式部集第四にみゆ、此うたの前に「みるらんとおもひおこせてふるさとのこよひの月をたれなむらん」とあるうたの詞書に、月おもしろきに、京をおもひやりてごありて、其次に又ごして此うたをいたしたりをとここにおくれてよめる

よみ人志らす

折々のつらさを何に歎きけんやかてなき世もあればありけり

後葉和歌集哀傷に出づ、うた本集におなじ

撰集考異第七

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

千載和歌集

故郷花といへる心をよみ侍ける

よみ人志らす

さゝなみや志賀のみやこはあれにしをむかしなからの山櫻かな

平家物語都落の文に、薩摩守忠度は、當世隨分の好士なり、其頃皇太后宮大夫俊成卿、勅を奉りて千載集えらばれけり、忠度乗り人四五騎がほごあひぐして、四つかの邊より歸りて、かの俊成卿の五條京極の宿所の門をたゝかせければ、内よりいかなる人ぞとへば、薩摩守忠度と名のりければ、落人にこそとききて、世のつゝましさに返事もせられず、門を明ざりければ、其時忠度、別の事にて候はず、此ほご百首つかねて候

を、見參に入らずして旅路へ罷出んことのくちをしさに、もちて参りて候、
なにかくるしく候べき、たちながら見參に入候ばやといひたりければ、
三位あはれとおぼして、わな／＼かゝる有さまにて候とも、なから
んあとまでも、此道に名をかけんこと、生前の面目たるべし、集めえら
ばれ候事に、此巻のうちにさるべき句候は、思召立て一首入られ候ひな
んや、かつうはまた念佛をも御とぶらひ候べしとて、えびらのうちより
百首の巻ものを取り出して、門よりうちへなげ入て、忠度、今は西海の
浪にしづむとも、此世におもひおく事候はず、さらはいらせ給へとて、
涙をおさへて歸りにけり、俊成卿涙をおさへて内に歸り入て、ともし火
のもとにて、此巻ものをみられければ、歌ごもの中に、故郷花といふ事
を「云々忍戀」云々その、ちいくほごもなく、世しつまりければ、かの
集えらばれけるに、忠度此道に透て道より歸りし心さしあさからず、た
ゞし勅勘の人の名を入らるゝこと、はゞかりあることなればとて、此一

首をよみ人知ずとして入られたりける云々、定家卿、忠度の歌をよみ人
あらずとて、千載集に入られたりしことを、心うくおぼして、後堀河院
御時新勅撰をえらばるゝ時、三代名をあらはすことこそおそれなりつれ
ば、いまは三代過給ひたれば、何かくるしかるべきとて、名をあらはし
て入られたりしこそやさしくあはれに覚えし云々」と見ゆ

春下

土御門右大臣の家に歌合しける時藤花をよめる

康資玉母

いつかたにほひますらん藤の花はるとなつとの岸をへたて、

長暦二年四月七日大納言家歌合に、作者五節君、上の句いづかたの梢さ
くらん藤なみのとあり

羈旅哥

百首の歌めしけるさき旅のうたとてよませ給ふける

崇徳院御製

かりころも袖のなみたにやごる夜は月も旅寝のこゝちこそすれ

按大納言長方卿集に、水路月と題して「ごまりするみなごに秋のやとるよは月もたひねのこゝちこそすれ」とあるに似かよひたるみうたなり

哀傷哥

花のさかりに藤原の爲頼なとゝもにて云々

中務卿具平のみこ

春くればちりにし花もさきにけりあはれ別のかゝらましかは

詞花集雑下に、作者赤染衛門として、首句をこそその春さしたる歌あり、家集にもみゆ、この親王の詠といとよく似たり

戀哥一

題しらす

よみ人あらす

いかにせんみかきか原につむ芹のねにのみなけとしる人のなき

平家物語題忍戀とあり、忠度集に見えす

戀哥五

題しらす

紫式部

わするゝは浮世の常と思ふにも身をやるかたのなきそわひぬる

紫式部家集に、詞書、久しくおとづれぬ人をおもひいでゝとありて「わするゝは云々返し、「たがさこもこひもやくるとほこゝぎすこゝろのかぎり待ぞわびにし、新古夏紫式部と見えて、二人の贈答のさまなるを、本集にも新古今にも、いづれも作者紫式部とあるはいかゞあらむ
雑歌中

前大納言公任なかに、住侍けるころ

中納言定頼

ふるさとのいたまの風にねさめしてたにの嵐をおもひこそやれ

榮花物語衣の珠に出づ、作者藤原定頼とす、三の句夢さめてとせり

返し

前大納言公任

谷風の身にしむことにふるさこのこのもこそ思ひやりつれ

榮花物語衣の珠に出づ、作者藤原公任とす、上の句山ざとの谷のあらしのさむきにはとせり

前大納言公任入道し侍りてなかに侍けるととき云々

いにしへはおもひかけきや云々

法成寺入道前太政大臣

返し

入道大納言公任

おなしとしちきりしあれは君かきる法の衣をたちおくれめや

榮花物語衣の珠に出づ、作者藤原公任、初句おなじき、おなじき、なごも云へり、さて同じとし契りかはしてきるべきを君がころもをたちおくれける」とせり

神祇歌

賀茂社の歌合とて人々すゝめて讀侍りける云々

賀茂重保
君をいのるねかひを空にみてたまへわけいかつちの神ならはかみ
治承二年三月十五日別雷社歌合に初句すべらきのとあり

卷之三

Blank page with a faint vertical line and a double-line border.

Vertical text in the bottom left corner of the page.

撰集考異第八

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

新古今和歌集

春哥上

題しらす

よみ人おらす

風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひきはるは來にけり

萬葉集十に出づ、初句風まじり、結句春去爾來、赤人集に、初句ふゞき
つゝ、二の句雪はふれども、結句春はきぬらし、家持集に、初二句月よ
めばいまだ冬なり、結句春はきぬとか」とあり
こきはいま春になりぬとみゆきふるとほ山の邊に霞たなひく

萬葉集八春雜歌に、中臣朝臣武良自作歌一首として出せり、六帖霞に出

づ、時は今春に成りぬと云々とあり

今さらに雪ふらめやはかけろふのもゆる春へこなりにしものを

萬葉集十に出づ、歌本集におなじ、赤人集に、五の句かけらふのこせり

春哥にて

源 重之

梅か枝にもうきほとにちる雪を花ともいはし春のなたてに

重之集に出づ、上の句まださかぬ枝にうづまば白雪を」とあり

山邊 赤人

あつさゆみ春山ちかく家居してたえすきつるうくひすの聲

萬葉集十に出づ、作者なし、下の句、たえずきくらん」とせり、赤人集

もおなじ

よみ人 忘らす

梅か枝になきてうつろふうくひすのはねしろたへに沫雪をふる

萬葉集十に出づ、歌本集に同じ、赤人集にも見えたり

きさらきまで梅の花さき侍らざりける云々

中 務

ゑるらめや霞の空をなかめつゝはなもにはほはぬ春をなけくと

本集一本二の句かすめる空をとせり、公任卿集にもみゆ、詞書、二月迄

梅のさかざりけるとし、前栽の梅にむすびつけたる」とあり

百首歌たてまつりしに春のうた 式子内親王

なかもつるけふは昔になりぬとも軒端の梅よわれをわするな

本集一本に、二の句今日ぞ昔、四の句軒端の梅はとせり、寂蓮法師集に

もみゆ、詞書、左大臣殿の御會に、四季戀とあるうちにみゆ

題しらす 壬生 忠見

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日にまかせたらなん

忠見集に見ゆ、うた本集に同じ、春日野をと題せり、公任卿後十五番哥

合にも、金玉集にも、作者重之とあるは、いかゞあらむ

題しらす

よみ人志らす

ふしておもひおきてなかむる春雨に花のしたひもいかに解くらん
六帖天象雨に出づ、作者赤人とせり、家集には見えず。

いそのかみふるき都をきて見ればむかしかさし、花さきにけり

中務集にみゆ、二の句ふる野のあたりとしたり、藤原清正集にもみえて、
二の句ふりにしさとをに見ゆ、三十六人撰の中務集には、二の句ふるき
わたりにとして、本集におなじき歌を載せたり、活字本もおなじ

春哥下

寛平御時后宮哥合

よみ人志らす

霞たつはるの山邊にさくらはなあかす散るとやうくひすのなく

寛平中宮歌合本集におなじ、新撰萬葉上春には三の句開花緒ハナナギとあり

春のくれかた實方朝臣のもごにつかはしける

藤原道信朝臣

ちりのこる花もやあるとうちむれて深山かくれを尋ねてしかな

小大君集にもみゆ、詞書、みちのぶの君、さねかたの君に、三月中のほ
ど、「ちりのこる花はありやと云々みやまかくれに云々返し」またちらぬ
花もやあるとたつねみむあなかましはし風にしらすな」とあり、此うた
は、後拾遺集の釋教に、實方朝臣として見え、もと贈答のうたなれば、
道信朝臣のは、花はありやとありて、實方朝臣の返しうたは、花もや
あるとゝにて、小大君の集のごこくなりしを、撰者のこゝろにてあらた
めたるなるべし

寛平御時后の宮の歌合のうた

よみ人志らす

待てといふにとまらぬものとしりなからしひてそをしき春の別は

寛平中宮哥合、本集におなじ、但し結句のはチをとしたり、新撰萬葉下
春に、下の句、しひてこひしき春のわかれかごあり

夏哥

題しらす

持統天皇御製

はるすきてなつきにけらしをろたへの衣ほすてふあまのかく山

萬葉集一に出づ、二の句夏きたるらし、四の句衣ほしたりとあり

よみ人あらす

さつきやま卯の花月夜ほととぎすきけともあかす又なかむかも

一本に二の句、卯の花月にとあり

中納言家持

ほととぎす一聲なきていぬる夜はいかてか人のいをやすくぬる

家集夏歌に出づ、みつね集にもみゆ、結句ぬるちねんとしたり

ほととぎすはなたちはなの香をとめてなくは昔の人やこひしき

六帖郭公に、ほととぎす花たち花の枝にゐて云々とあるは、此うたと一

つうたなるを、平家物語二十吉田女院みうたのさまに書たるまぎらはし、

増基法師熊野紀行に、橘の木にほととぎすのなき侍るに、「ほととぎす花

たちはなのかばかりになくはむかしや戀しかるらん」などあるも全く同じき趣なり

秋哥上

題しらす

山邊 赤人

このゆふへふりくる雨はひこほしのとわたる舟のかひのしつくか

赤人集に出づ、うた本集に同じ、家持集にもみゆ、活字本また同じ

凡河内みつね

秋の野をわけゆく露にうつりつゝわかこころも手は花の香をする

躬恒集、上の句、秋の夜の道を分行くかへりには、四の句吾衣手のとしたり、本集一本三の句うつろひてとせり

よみ人あらす

小くらやま麓の野邊のはなすゝきほのかに見ゆる秋のゆふくれ

六帖薄に出づ、うた本集におなじ、朗詠集にも見えたり

秋哥下

題しらす

よみ人志らす

秋田もるかりいほつくりわかをれは衣手さむし露そおきける

萬葉集十の詠露に出づ、初二の句秋田菊借庵乎作とし、下の句衣手さむく露ぞおきにけるとせり、家持集には、初句秋の田の、六帖かりほに出でて、秋の田のかりほをみつゝこしたり

人 丸

あきされはおく白露にわかやとの淺茅かうは葉いろつきにけり

萬葉集十に出でて作者なし、三四の句吾門の淺茅何浦葉とあり、家持集にもみゆ、うは、チうればとしたり

凡河内みつね

はつ雁のはかせすゝしくなるなへにたれかたひねの衣かへさぬ

曾丹集に出づ、上の句くるかりの羽風涼しくなるときはとある歌あり

もみちをみにまかりてよみ侍ける 前大納言公任

うちむれてちるもみちはを尋ねれば山路よりこそ秋はゆきけれ

家集の詞書に、ひかし山のあたり人々もみちみに行てとして、このうたあり、初の二句、色ふかきみねの紅葉をこせり

冬哥

題しらす

源 重之

名取川やなせの浪もさわくなり紅葉やいとゝよりにてせくらん

家集には、やなせチはそせ、いこゝよりにてチよりにていこゝこしたり

かみなつき時雨ふるらしさほやまのまさきの葛いろまさりゆく

寛平中宮哥合本集におなじ、新撰萬葉に、三の句里山の、四の句かつらチ黄葉こせり、源道濟集山さにて紅葉をみて、「神なつきしくるゝまゝにかたをかのはゝその紅葉色まさりつゝ」なごあるも類詠なり

賀哥

題しらす

よみ人志らす

はつ春のはつねのけふのたまは、き手にとるからにゆらく玉の緒
萬葉二十に出づ、右一首、右中辨大伴宿禰家持作、但依大藏政不堪奏
之也とあり、袖中抄私云、此うたは家持がなり、夫木集春一にも、中納
言家持と見ゆ

延喜御時屏風哥

貫之

年ことにおひそふ竹のよ、を経てかはらぬいろを誰こかはみん

貫之集五に出づ竹と題せり、伊勢集にもみゆ、詞書に竹多かる所とあり

題しらす

伊勢

山風は吹けと吹かねと志らなみのよする岩根はひさしかりけり

伊勢集にも貫之集にもみゆ、一本下の句いはほはひさしかりけりとあり

よみ人志らす

ときはなる松にかゝれる苔なれば年の緒なかきしるへとそおもふ

六帖書に出づ、うた本集に同じ、また祝にも見ゆ、初句ちよをふる、下
句、年の緒長く成にけらしもとあり、續古今集には、作者みつねとあり、
家集にも見ゆ

嘉應元年入道前關白太政大臣宇治にて河水ひさしくすむといふことを
云々 藤原清輔朝臣

年經たる宇治のはしもりこそ、はむ幾代になりぬ水のみなかみ

家集に、結句みづのしらなみとあり、古寫本活字本共に本集に同じ

哀傷哥

題しらす

小野小町

あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつれの日まで歎かん

家集も本集におなじ、さてたれ人にかへしのうたともなきを、榮花もの
がたりみはてぬ夢に、攝津守爲頼朝臣といふ人「よのなかにあらましか

ばさおもふ人なきがおほくもなりにけるかな(拾遺哀傷)これをきよて、東宮の女藏人小大進君かへし、「あるはなく云々、四五の句、あはれいつまであらんとすらんとあり

玉勝間四、此歌古今集小町集などにもあり、すべて此小町は、いとも信がたきものにて、此小大君が歌のおほかたは、小大を小町にまきはしつるなるべし、然るを新古今に、このうたを小町集よりとりて、小町として入られたるは誤なり

やまひにしつみてひさしうこもりゐて侍けるかたましくよろしうなりて云々 藤原季繩

くやしくそ後にあはむとちさりけるけふを限といはましものを 宇治拾遺物語に、作者季直少將とあり、いつれか誤りあるべし

離別哥

題しらす

大江千里

別れての後もあひみんとおもへともこれをいつれの時とかはしる

赤人集にもみえ、また句題和歌にも出たれど、作者大江千里とはさためがたくやあらむかし

みこの宮ご申ける時云々 後三條院御歌

おもひいてはおなし空とは月を見よほとはくもゐに廻りあふまで 故事談に初句わすれずはとあり

羈旅哥

題しらす

よみ人あらず

あさきりにぬれにし衣ほさすしてひとりや君か山路こゆるん

萬葉集九に岡本御宇天皇幸紀伊國時歌二首とある一首にして、共に作者未詳とせり

あなかとりのなのをゆけはありまやま夕霧たちぬ宿はなくして

萬葉集七に出づ、二の句ゐる野を來ればとせり、六帖作者不知、下の句

きりたちわたり明ぬこのよはとあり

かみかせや伊勢の濱萩をりふせて旅寝やすらんあらし濱邊に

萬葉集四に出づ、碁檀越往伊勢國時留妻作歌一首とあり、初句神風之と書けり、人丸集にも見ゆ、旅ねかすらむとせり、六帖旅に出づ、うた本集のごとし

戀哥一

題しらす

よみ人志らす

よそにのみ見てや、みなんかつらきやたかまのやまの峰の白雲

千載集、左京大夫顯輔卿、花のうたに、「かつらきやたかまのやまのさくらばなくもゐのよそにみてやすきなん」とある、この本歌ならむかし音にのみありとき、こし三吉野の瀧はけふこそ袖におちけれ

伊勢集下に出づ、音にのみありとき、つるとせり、一冊本同集もおなじ

人まろ

石上布留のわたのほにはいてす心のうちにこひやわたらん

萬葉集九に出でて、拔氣大首任筑紫時娶豐前國娘子紐兒作歌三首とあるうちの一首にて、作者人丸ならぬ事明し、結句こふるこのころとあり女をものこしにほのかにみてつかはしける

清原元輔

にほふらんかすみのうちの櫻花おもひやりてもをしき春かな

元輔集に、うちヲ遠、をしきはるかなヲをしまるゝかなごあり

題しらす

藤原興風

霜のうへにあとふみつくる濱千鳥ゆくへもなしと音をのみそなく

小野道風秋萩帖には、結句わひつゝぞふるとあり

兵衛佐に侍ける時五月はかりによそなからもの申そめてつかはしける

法成寺入道前攝政太政大臣

ほと、きすこゑをはきけと花の枝にまたふみなれぬ物をこそ思へ

返し馬内侍 馬内侍集に、詞書、左大将兵衛のすけにておはせし時、卯月にものをいひ初給ひてとあり

題しらす

よみ人あらず

有度濱の疎くのみやはよをはへん浪のよるくあひみてしかな

六帖濱に出づ、二の句うとくつのみやとあり

あつま路の道のはてなる常陸帯のかことはかりもあはむとそおもふ

六帖帯に出づ、うた本集の如し、風俗歌集には、常陸帯としての辭なし、

力ありて聞ゆ

濁江のすまんことこそかたからめいかてほのかに影を見せまし

伊勢集にみゆ、作者人とあり、いかでういかは、結句かけをだにみんこ

せり

ありとのみ音にきつとつおとは川わたらは袖にかけも見えなむ

九條右大臣集にみゆ、わたらはそこにかけやみえなんとあり

みつくきの岡の木の葉をふきかへし誰かも君をこひんごおもひし
本集一本に、二の句岡の葛の葉、四の句たれかは君をとあり、六帖にも見ゆ

藤原元眞

霜こほりこゝろもとけぬ冬の池によふけてそなく鶯鴛のひとこゑ

六帖をしに出づ、作者よしもちとあり、うた本集のごとし、元眞集にはたゞの戀ご題したり、活字本同じ

戀哥二

大納言成通ふみつかはしけれとつれなかりける女を後のよまでのうらみのこるへきよし申ければ
よみ人あらず

玉章のかよふはかりになくさめて後の世までのうらみのこすな

成通卿集に、詞書、あるひとにちかくみる、さてやみなばのちのよのさまたげにもなりぬべしと申たりしかば、よみておこせたりし「玉章の云

々、返しつかはし、「いくかへり逢坂山をたどりつゝこさずはいかゞう
らみざるべき」とあり

戀哥三

題しらす

よみ人あらず

かりそめにふしみの野邊の草枕つゆかゝりきと人にかたるな

本集一本、初句かりそめのとす、續詞花集戀中にも見えたり

戀哥四

よみ人あらず

淺茅おふる野邊やかるらんやまかつの垣穂の草はいろもかはらす

六帖かきほに出づ、初句あさちふのとせり

ほのみえし月をこひしとかへるさの雲路の浪にぬれてこしかな

本集一本に、こひしとチこひしみせり、馬内侍集にもみゆ、詞書、そ
のとき、人のおくにゐるかけはみえて、なしとてかへしたればとありて、

二の句月をこひつゝ、結句ぬれし袖かもとあり

戀哥五

題しらす

よみ人あらず

おもほえず袖にみなとのさわくな諸越船のよりしはかりに

本集一本に、二三の句、袖になみだの騒くらし」とあり、勢語廿六段に
も見ゆ

妹か袖わかれし日よりゑろたへの衣かたしきこひつゝそぬる

人丸集に出づ、うた本集に同じ、三十六人集の柿本集にはなし

うきながら人をはえしも忘れねはかつうらみつゝ尙そこひしき

古寫本の本集に、えしもチえこそとせり、勢語廿六段にも出づ、うた本
集の如し

命をはあたるものとき、しかとつらきかためは長くもあるかな

本集一本、四の句つらきためにはごせり、清正集にもみゆ、詞書、人に

いかゞありけんと有て、結句なかくぞ有けるとあり、三十六人集本、同活字本も同じ

いまよてに忘れぬ人は世にもあらしおのかさまく年のへぬれは

六帖むかしあへる人に見えたり、業平集にも見ゆ、活字本もおなじ、伊勢物語にも見ゆ

玉水を手にむすひてもこゝろみむぬるくは石のなかもたのまし

伊勢集に出づ、初句山みづをとあり

やましろのゐての玉水手にくみて頼みしかひもなき世なりけり

六帖今はかひなしに出づ、うた本集の如し、勢語には、くみてヲむすひ、たのみしヲたのめしとあり

君かあたり見つゝをうらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも

萬葉集十二に出づ、二の句みつゝも將居とあり、柿本集、伊勢物語にも見ゆ

雲のある遠山鳥のよそにてもありとしきかはわひつゝそぬる

六帖山鳥に出づ、作者人丸とあり、萬葉にも家集にも見えず、新古今戀

五に作者未詳、この歌を載せたり

我よはひおごろへゆけはあろたへの袖のなれにし君をしそおもふ

萬葉集十二に出づ、初句我よはひ之とあり

いまよりはあはしとすれやあろたへのわか衣手のかはくときなき

萬葉集十二に出づ、結句于時毛奈吉とあり

たまくしけあけまく惜きあたら夜もころも手かれて獨かもねん

萬葉集九に出づ、紀伊國作歌なり、六帖ひとりねにも見えて、作者人丸とあり

逢ふことをおほつかななくてすくすかな草葉の露のおき替るまで

本集一本に二の句おほつかなくもとせり、相摸集にもみゆ、詞書、七月七日人のもとより「あふことを云々返し、「いと、しくおほつかなさやま

さりなんきりたちわたる秋のしるしに」さありてもさ贈答歌なり
秋の田のほむけの風のかたよりにわれは物おもふつれなきものを

萬葉集十に出づ、寄水田八首の一なり、人丸集にも見えたり
大淀のまつはつらくもあらなくに恨みてのみもかへる浪かな

勢語七十二段に出づ、伊勢集もおなじ、本集の一本に初句あふことをと
せり

白浪はたちさわくともこりすまの浦のみるめはからんとそおもふ

六帖海松に出づ、うた本集におなじ、本集一本初句あら浪はとせり
さしてゆくかたは湊のなみたかみうらみてかへるあまの釣舟

六帖ふねに出づ、うた本集におなじ、本集古寫本腰句波ならぬとあり
雑哥中

題しらす
よみ人志らす

あかのあまの鹽やくけふり風をいたみたちはのほらて山にたなひく

萬葉集七に出づ、四の句たちは上らずとあり、六帖煙に見え、初句すま
のあまのとせり

つらゆき

なにはめの衣ほすとてかりてたく葦火のけふりたゝぬ日そなき

家集には二三の句、やごのみあればかりてほすとせり

たゝみね

年ふれはくちこそまされはし柱むかしなからの名たにかはらて

忠見集にもみゆ、詞書、伊よにくたるに、よしあるうかれめに、「おとに
きゝめにはまだみぬはりまなるひゞきのなだときくはまことか」返し女
とありて「としふれは云々となり

雑哥下

題しらす

よみ人志らす

さゝなみや比良山風の海ふけはつりするあまの袖かへるみゆ

萬葉集九に見ゆ、槐本歌として、初句さゝ波之とあり、秋萩帖ひらを比堂としたり誤なるべし

殿上はなれ侍てよみ侍ける

藤原清正

あまつかせふけるの浦にゐる鶴のなとかくもゐに歸らさるへき

忠見集にも出づ、詞書に、藤原きよたゝが紀守になりて、殿上おりてと
しころになりて、小貳命婦にやるにかはりて、「天つ風云々とあれば、實
は忠見か清正にかはりてよまれたるなり

わつらひける人のかく申侍りける

よみ人志らす

なからへん年もおもはぬ露の身のさすかにきえんことをこそ思へ

小馬命婦集にみゆ、詞書、堀川ごのゝあざりのきみ、いたくわづらひ給
ふとて、母のもとにおはして、たゞう紙にかきつけて、小馬こそみよと
て「存へむ年も云々となり

題しらす

よみ人志らす

そむけごも天の下をしはなれねはいつくにもふる涙なりけり

賀茂保憲女集に見ゆ、うた本集の如し

さらしにあしてなかうたなとかきておくに

女御徴子女王

みな人の背きはてぬる世の中にふるのやしろの身をいかにせむ

素性集に詞書、人々ものかたりして、よのはかなき事をいひて、「みなひ
とのむかしがたりになりゆくにごありて、下の句これと全くおなじきう
た有り

神祇哥

香椎宮の杉をよみ侍ける

よみ人志らす

ちはやふるかしの宮のあやすきは神の禊にたてるなりけり
續詞花集にも出てたり

撰集考異第九

新勅撰和歌集

春哥上

題しらす

冬すきてはるはきぬらし朝日さすかすかのやまに霞たなひく

萬葉集十に詠霞とある中の一首なり、二の句春きたるらしとあり、六帖霞に出づ、二の句春たちぬらし」とせり

ひさかたのあまのかくやまこのゆふへ霞たをひく春たつらしも

萬葉集十春雜歌に出づ、赤人集に、二の句天の端山にとし、結句春立ちにけむさす、家持集二の句赤人集に同じくて、結句春たちにけりとあり、

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

よみ人おらす

三十六人集本は共に家持集に同じ

柳をよみ侍ける

伊勢

あを柳のえたにかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる

家集も本集に同じ、六帖柳に出づ、作者貫之とせり、三の句しら露をとあり、貫之集には見えず

あさみごりそめてみたるる青柳の糸をははるの風やよるらん

伊勢集に見ゆ、詞書に、歌合のとき亭子院とあるは、詞かけたるなるべし、また坂上是則集にもみえて、詞書、春亭子院の歌合にとあり、新撰朗詠作者是則として、結句のよるちとくとしたり、亭子院歌合、初春二十首のはしめに、此うたを伊勢が、「青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる」に番ひて、作者是則とあれば、本集は伊勢集よりとられたるにて、伊勢集にいりたるも衍なり
梅花をうりて中務かもとにつかはしける

九條右大臣

いとはやも霜にかれにしわか宿の梅をわすれぬ春はきにけり

中務集にもみゆ、詞書に、人のひさしくおとづれぬに、正月一日」とありて、一二の句いづもや霜かれしかとあり

山上憶良

つくしにて梅の花をみてよみ侍ける

春されはまつさくやとの梅の花ひとり見つ、やけふをくらさん
萬葉集五梅花廿二首の中の一首なり、結句春日くらさむとあり、家持集にもみゆ、結句のけふを春をさしたり

坂上是則

亭子院歌合に

きつゝのみなくうくひすの故郷はちりにし梅の花にそありける

拾遺集賀にも出て、作者本集におなじ、寛平中宮歌合には、作者みつねごあり、亭子院歌合も然るを、本集は何によれるにや、即ち左の如し

左勝

みつね

きつゝのみ云々

右

是 則

みちとせになるてふ桃のことしより花さく春になりそしにける

題しらす

よみ人志らす

ちろたへの浪路わけてや春は来る風ふくまゝに花もさきけり

新撰萬葉下、また寛平中宮歌合にも見ゆ、共に本集におなじ

春哥下

題しらす

源 重之

いろさむみ春やまたこぬとおもふまで山のさくらを雪かたとそみる

重之集に出づ、一の句風さむみとせり、活字本も同じ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみひと志らす

春なから年はくれなんちる花ををしごなくなるうくひすの聲

寛平中宮歌合もおなじ、新撰萬葉をしとぞ許々良うくひすの鳴とあり

色ふかく見る野邊たにもつねならは春はすぐとも形見ならまし

寛平中宮歌合、新撰萬葉下ごもに、四の句はるは往くごもとあり

歳時春尙少といへる心をよみ侍ける

大江千里

年月にまさるときなしとおもへばや春しもつねにすくなかるらん

大江千里句題和歌よりとりいれたるなるべし、句題和歌は、大江千里の自詠と心得たりしよりの誤りならむかし、赤人集にも出たり、句題和歌のこと前に論ひおきたれば、こゝにはもらしつ

夏哥

題しらす

よみ人志らす

千はやふる賀茂の卯月になりにけりいさうちむれて葵かさゝん

六帖あふひに出づ、一本賀茂ヲ神としたり

中納言行平家歌合に

よみ人志らす

すむ里は忍の森のほと、きすこのしたこゑをしるへなりける

在民部卿家歌合、いまの本に杜チ山ごしたり

題しらす

田原天皇御製

神南備のいはせの森のほとゝきすならしの岡にいつか來なむ

家持集にもみゆ、歌本集に同じ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人あらず

をしなへてさつきの空を見わたせはみつもくさはも縁なりけり

新撰萬葉には、四の句くさばもみづもごあり、六帖五月に出づ、作者貫之とし、結句みなみごりなりごあり、貫之集には見えず

秋哥上

題しらす

白露のおりいたすはきのしたもみちころもにうつる秋はきにけり

新撰萬葉上に出づ、一二の句織足須夏來の野邊とあり、寛平中宮歌合には、初の句をめでいだす、四の句ころもにうつすとあり

このころの秋風さむみ萩か花ちらすしらつゆおきにけらしも

人麿集に出づ、うた本集の如し、三十六人集本には、二の句秋風寒し、結句置にけらしなとあり、活字本もおなじ

菅家萬葉集のうた

よみ人あらず

名にしおはゝあひてたのまん女郎花ひごの心のあきはうくとも

新撰萬葉上に見ゆ、下の句人のこゝろ丹秋庭來輛とあり

題しらす

おほつかなたれとかしらん秋霧のたえまに見ゆるあさかほの花

六帖朝顔に出づ、作者家持とせり、家集には見えず

秋哥下

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

秋の夜にあまてる月のひかりにはおくしらつゆを玉とこそみれ
新撰萬葉上にも見ゆ、うた本集に同じ

からころもほせと袂のつゆけきはわかみの秋になればなりけり
新撰萬葉上にも見ゆ、

冬哥

題しらす

大伴池主

かみな月時雨にあへるもみち葉のふかはちりなん風のまに／＼

本集一本に、作者大伴池重とせり、家持集にもみゆ、うた此集に同じ

賀哥

圓融院御時中將公任と基つかうまつりてまけわさにあろかねの籠に

むしいれて弘徽殿に奉らせ侍ける

小野宮右大臣

萬代のあきをまちつゝ聞きわたれいはほにねさす松虫のこゑ

本集一本、三の句なき渡れとあり、元輔集にもみゆ、詞書に、ある所に

まつむしすゝむし籠にいれて、ひわりこなごそへて侍りしに」としたり

題しらす

よみ人あらす

月も日もかはりゆけともひさにふる三室の山のとこみやとこ

萬葉集十三の長うたの返しうたなり、結句とつ宮所とあり

羈旅哥

題しらす

よみ人あらす

いつくにかわかやとりせん高島の勝野の原にこの日くらしつ

萬葉集十三に出づ、高市黑人羈旅八首とある一首なり、結句ひの暮去者

とあり

くるしくもふり来る雨かみわかさき佐野の渡に家もあらなくに

萬葉集三に出づ、長忌寸奥麿歌一首とあり、續古今にも入りたり

神祇哥

閏三月侍ける年齋院に参りて云々

京極前關白太政大臣

春はなほのこれるものを櫻花注連のうちには散りはてにけり

次官惟實をして、女房にたまはせけり。三月に潤ありけるに、「春はなほ云々に見ゆ、結句ちりにけるかな」としたり

戀歌一

題しらす

よみ人志らす

古はありもやしけんいまそしるまたみぬ人をこふるものとは

勢語百十一段に見ゆ

かすか山あさ見る雲のおほつかなしらぬ人にもこひわたるかな

萬葉集四に出づ、三の句おほしくとあり、六帖知ぬ人に出で、作者な

かとみの女郎とせり、二の句朝みるヲ朝ある、四の句人にもヲ人をもと

たり

あしわかぬ浦にきよする白浪のしらしな君はわかおもふとも

六帖雜思のいひはじむに出づ、夫木雜七浦にも見ゆ、五の句かく思ふと

もとあり

いは見かたうらみそふかき奥津浪よする玉藻にうつもるゝ身は

六帖藻に出づ、四の句うちよする藻にとせり

難波江のこやに夜更て海人のたくしのひにたにもあふ由もかな

六帖火に出づ、初句なにはめのとせり

あさなく海人の棹さすうらふかみおよはぬ戀もわれはするかな

六帖あまに出づ、うた本集に同じ

五節のころ舞姫のさし櫛をとりてつかはすとて

藤原義孝

人しれぬ心ひとつをなけきつゝつけの小櫛そさすそらもなき

家集には、結句さすかひぞなきとあり、古寫本も同じ

題しらす

みつね

山蔭につくるわさたの木隠れてほにいてぬこひに身をやつくさん

躬恒集には見え、つらゆき集戀にみゆ、初句谷陰に、二の句つくる山田の、三の句みがくれてとしたり、三十六人集本には、下句穗に出ぬ戀はわびしかりけりとせり

よみ人志らす

いとへともなほ住の江の浦にほす網の目しけきこひもするかな

六帖あみに出づ、うた本集に同じ

こひわふる衣の袖はしほみちてみるめかつかぬなみそたちける

本集一本、新撰萬葉上共に初句戀巨るとし、又或本二の句衣の浦とす

戀哥二

寛平御時后宮歌合歌

よみ人志らす

夏虫にあらぬわか身のつれもなく人をおもひにもゆるころかな

本集一本には、二の句あらぬものからとあり

夏草のしけきおもひは蚊遣火のしたにのみこそ燃えわたりけれ

本集一本には、結句むせわたりけれとせり、新撰萬葉上にも出でたり年を経てもゆてふ富士の山よりもあはぬおもひは我をまさされる

詞花集戀の上に既にいづ

かたいごもてぬきたる玉の緒をよはみみたれやしなむ人のしるへく

萬葉集十一、柿本集にも見ゆ、新撰萬葉上戀、初句かたいご丹、二の句貫玉の、下の句素手戀者人哉知南とあり、續後撰集戀一にも載たれど、うたは本集におなじ

こひわひぬ蟹のかる藻に宿るてふわれから身をも碎きつるかな

勢語五十七段に見ゆ

筏おろすそまやま川のみなれさほさして來れともあはぬ君かな

六帖袖に出づ、うた本集に同じ

宮木ひくいつみの袖にたつたみのやむときもなくこひ渡るかな

六帖袖に出づ、二の句あづさの袖にとせり、古本人丸集に結句わがこふ

らくにあり

とをつ人かりちの池にすむ鴛鴦のたちてもゐても君をしそおもふ

萬葉集十二に出づ、三の句すむ鳥のとあり

あさかしはぬるや川邊のしのゝめのおもひてぬれは夢に見えつゝ

萬葉集十一に出で、寄物陳思と題せり、二の句閨八、結句夢のみえ來

とあり

小男鹿のあさふすをのゝ草わかみかくろひかねて人にしらるゝ

萬葉集十に出で、寄鹿と題せり、結句所知名とあり、人麿集もおなじ

しらやまの雪のした草われなれやしたにもえつゝ年のへぬらむ

六帖人しれぬに出づ、兼盛集にも見ゆ、詞書、雪のふりたるあしたに

とあり

君にあはんその日をいつとまつの木のこけの亂れて物をこそおもへ

六帖苔に出づ、上の句あふことをいつかそのひとまつの木のとあり

いかはかり物おもふときの涙かはからくれなるに袖のぬるらん

六帖なみだがはに出づ、結句そでのそむらんごあり

戀哥三

題しらす

よみ人あらす

あけんとして千鳥しはなくしろたへの君か手枕いまたあかなくに

本集一本にあげぬととあり、萬葉集十七、六帖ふせりに出づ、人丸集

初句あげぬべく、三の句しきたへのとせり

現とも夢ともなくてあけにけりけさのおもひは誰まさるらん

相摸集にみゆ、詞書、又人いかなるをりにか、「現とも夢とも云々返事、

みぬゆめもあらぬうつゝもおしなべてくたすや袖のなみだなるらんとあ

り

玉の緒のたえてみしかき夏の夜のはになるまでまつ人のこぬ

六帖玉の緒に出づ、作者つらゆきとせれど、家集にはみえず

戀哥四

題しらす

よみ人ゑらす

さりともと思ふらんこそ悲しけれ有るにもあらぬ身を知らずして
勢語六十五段に出づ、うた本集に同じ

あつさゆみすゑのゝ原に鳥狩する君かゆつるの絶えんとおもへや

萬葉集十一、寄物陳思、六帖かりに出づ、共本集に同じ

あつさゆみひきみひかすみ昔よりこゝろは君によりにしものを

萬葉集十二、寄物陳思の中に出づ、梓弓引見縦見思見而既心齒スツミコトハナよりにし
物を」とあり、伊勢物語にはひけとひかねとごせり

伊勢のあまの朝を夕なにかつくてふあはひの貝のかたおもひして

萬葉集十一、寄物陳思の歌中の一首なり、古今集戀四、下の句、みるめ
に人をあくよしもがな、六帖戀、人丸集も共に本集におなじ

ゆふたゝみ白月山のさねかつら後もかならすあはんとそおもふ

萬葉集十二、寄物陳思の中の一詩なり、本注に白月山は、或は田上山か
とせり、冠辭考も同じ

逢坂のせきは夜こそもりまされくるゝをなとてわれ頼むらん

伊勢集にみゆ、人のうたなり

さくらあさのをふの下草露しあらはあかしてゆかむ親はしるとも

萬葉集十一、寄物陳思に出づ、結句母はしるともとあり、人丸集、活字
本も同じ

露霜のうへともしらしむさし野のわれはゆかりの草葉をらねは

九條右大臣集二の句うへともわかじ、下の句我はゆかりの七文字闕たり
いまはとてわするゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな

伊勢物語に出づ、うた本集に同じ、一本には結句まかせざらなんこあり

夕されは道たさくし月まちてかへれわかせこそまにも見ん

萬葉集四に出づ、豊前國娘子大宅女歌とあり、初句夕闇イナは、四の句行我イナ

せことあり、伊勢集にもみえたれど、混ひ入りたるなりけむ

額田王

君まつとわかこひをればわかやとのすたれうこかし秋風そふく

家持集にも入たり

おのひてものおもひ侍けるとき 中務

身のうへも人の心もあらぬまはこそそもなく音をのみそ泣く

中務集には此うた作者人ごありて、返し中務「君だにもこそぞとしらぬ
調をばいかにしりてかあはれとおもふ」と見ゆ

九條太政大臣中將に侍りけるととき云々

權中納言定頼女

心にはおのふとおもふをしきたへの枕にてこそまつは見えけれ

本集一本、定頼母とあり、家集に上の句、こゝろにはおもひいてじとし
のぶれごゝあり

題しらす

よみ人あらす

梓弓ひきつのつなる莫鳴菜のたれうきものとあらせそめけん

本集一本、中院本、萬葉集十共に二の句ひきつのへなるとあり、また下
の句、花さくまでにあはぬ君かも、十三巻にも、花さくまでにいもにあ
はぬかもと見えたり、猿丸大夫集に載りたるも萬葉十三におなじ
鳩鳥のおきなかかはゝたえぬとも君にかたらふことつきめやも

萬葉集二十に出づ、作者散位寮散位馬史國人ごあり、四の句きみにかた
らむとせり、六帖鳩に出づ、うた本集に同じ

たちておもひあてもそおもふくれなるの赤裳たれひきいにし姿を
萬葉集十一、正述心緒の中に出づ、四句あかもすそひきとあり、六帖裳

に出で、本集に同じ
くれたけのしけくも物をおもふかな一夜隔つるふしのつらさに
六帖一夜隔てたるに出づ、作者つらゆきとせり

戀哥五

題しらす

よみ人おらす

君みすてほこのふるやの庇にはおふことなしの草をおひぬる

本集一本、結句草ぞおひけるとせり、六帖ことなし草に出づ、初句君みてしごあり

いへはえにふかくかなしき笛竹のよこゑはたれごとふ人もかな

本集一本に笛竹ヲ吳竹とせり、六帖笛に出づ、うた本集に同じ、源氏須磨奥入作者具平とあり

六の緒のよりめことにそかはにはふひく少女子の袖やふれつる

六帖琴に出づ、うた本集の如し、本集一本には、三の句香に匂ふごあり玉の緒をあわをによりて結へらはたえての後もあはんとそおもふ

本集一本、三の匂むすべればとせり、萬葉四にも、六帖玉の緒にも出づ作者紀の女郎とあり

あふことは玉の緒はかりおもほえてつらき心のなかくもあるかな

勢語卅段に出づ、下句つらきころのなかくみゆらんとあり

人はいさおもひやすらん玉蔓おもかけにのみいご、見えつゝ

勢語廿一段に出づ、うた本集に同じ、六帖玉蔓にも同じく見ゆ

なかゝらぬいのちのほとに忘るゝはいかにみしかき心なるらん

勢語百十三段に出づ、うた本集におなじ

たのめたりける女につかはしける

あふことをたのめぬとたに久方の月をなかめぬ宵はなかりき

本集一本、二の句ためぬにだにとせり

返し

相 摸

なかめつゝ月に頼むるあふことを雲井にてのみすきぬへきかな

相摸集詞書に、まかりあはんといひし人に、月頃をまて、かならずあはんといはせたりければ、またいづら、これもやすきぬべきなごこて、「逢

ふ事云々、返し「ながめつゝ云々ごあり

中納言定頼卿のうちをみせたらはと申て侍ければよめる

よみ人老らす

あた人の心のうちをみせたらはいとつらさの數やまさらん

定頼卿集詞書、内にまいりしまたのよ、せちにいふべきことなんあるとて、み車のありけるを、さるべき人にさぶらはぬほごに、えいてさりければ、心のうちをみせてまつらばやと聞えたりければ、「あた人の云々、初句うき人のごあり、返し「むかしよりつらきころをたえてみば人にいくへのかずをさゝまし

題しらす

つらゆき

花ならてはなるものはしかすかにあたなる人の心なりけり

家集に女のうたとしたり、二の句うつろふものを、結句心とぞきくごあり、活字本もおなじ

雑哥一

五節の比權中納言定頼内にさふらひけるにつかはしける

よみ人老らす

ひかけさす雲の上にはかけてたにおもひもいてしふるさとの月

定頼卿集詞書、まされ給ひし所ありしころ、五せちにうちにまゐりたれば、「日影云々返し、殿上なごまゐりなごして、いと物騒がしければ、わろきなめりとして「かけとめぬ月にころのくれそめてとよのあかりもあられさりけり」とあり、また續故事談第一五節に、上東門院へ人々まゐりてあそびけるに、右大辨定頼朝臣、かはらけとりてよめる、「ひかけさす雲のうへ人みざりせばとよのあかりをいかでしらまし」なごもあり
なけくこご侍ける頃紅葉のちるをみて云々

大納言公任

紅葉にも雨にもそひてふるものはむかしをこふる涙なりけり

定頼卿集にもみゆ、詞書、中宮の女房、人にわすられて、なげきけるを、十月ばかりにやり給ひける、「紅葉にも云々、中納言みかへし、「春ちりし花をおもひてもみち葉のめにとまらぬは涙なりけり」となり

冬の頃里に出て大納言三位につかはしける

紫式部

うきねせし水のうへのみこひしくて鴨のうは毛にさえそおとらぬ

從三位廉子

うちはらふ友なきころの寢覺にはつかひしをしそ夜半に戀しき

紫式部集詞書に、さとに出て、大納言の君ふみたまへるついでに、「うきねせしみつのおへのみ云々返し、うちはらふ云々とあるによれば、本うたは大納言のうたにて、この返しのうたは紫式部なり

雑哥二

題しらす

よみ人志らす

あさなけによのうきことをしのふとてなげきせしまに年そへにける

本集一本に、初句朝夕にとせり、六帖うらみに出づ、うた本集に同じ

雑哥三

題しらす

人丸

三吉野の御船の山にたつ雲のつねに逢はむと我おもはなくに

萬葉集三に、初句瀧の上のとありて弓削皇子の作とせり、六帖雲に出づ、下句常なるべくもあらぬ我身とあり、家持集にもみゆ、三四の句ある雲のつねならんともとしたり

雑哥四

題しらす

よみ人志らす

やましろのくせの鷺坂神代よりはるはもえつゝあきは散りけり

萬葉集九に、鷺坂作歌一首として出たり、四の句春者張乍と見ゆ

くにのみやこのあれにけるをみてよみ侍ける

みかのはら國の都はあれにけりおほみや人のうつりいぬれは

萬葉集六に出づ、春日悲傷三香原荒墟歌とある長歌の反歌なり、結句遷ツク去禮者マシメシごあり

題しらす

世の中はなと大和なる見馴川みなれそめてそあるへかりける

六帖川に出づ、二の句をぞやまとなる、四の句見馴をめぐりたり

いとまあらはひろひにゆかん住吉のきしによるてふこひわすれ貝

萬葉集七、攝津歌の中に見ゆ、四の句、岸によるとふとあり

こひしくは濱名の橋をいて、見よあたく水にかけやとまると

六帖橋に出づ、古一本に橋をヲ橋にとせり

かつしかの眞間のうらまをこく舟のふな人さわく浪たつらしも

萬葉集十四の東歌下總國歌に見ゆ

いまさらに更級川のなかれてもうき影みせんものならなくに

六帖川に出づ、うた本集の如し

陸奥にありといふなる玉川のたまさかにたにあひ見てしかな

六帖川に出づ、うた本集に同じ

朝ことにいはみのかはの水尾絶すこひしき人にあひ見てしかな

六帖川に出づ、うた本集に同じ、古一本初句あさゆふにとせり

いもかため玉をひろふときのくの湯等の岬にこの日くらしつ

萬葉集七に出づ、六帖崎にも見ゆ、歌共に本集に同じ

もかり舟おきこきくらしいもか島かたみの浦に田鶴かけるみゆ

萬葉集七に出づ、六帖嶋にも見ゆ、うた本集に同じ

しかのあまの煙やきたてやく鹽のからきこひをも我はするかな

萬葉集十一に出づ、うた本集に同じ、右一首或云石川君子朝臣作之とあり、本集一本二の句煙たてつとせり

しかのあまのめかり鹽やきいとまなみ櫛笥の小櫛とりも見なくに

萬葉集三石川少女歌一首とあり、古一本少女ヲ女郎に作れり

撰集考異第十

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

續後撰和歌集

春哥上

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 　　よみ人あらず

氷ごとく春たちくらしみよし野のよしの、瀧のおさまさるなり

萬代集一春上に出づ、うた本集の如し、古今集冬、よみ人あらず、「ふる雪はかつぞけぬらしあしびきの山の瀧つせおとまさるなり」とあるにや
れるにや

冬くれて春たちくらしあしひきの山にも野にもうくひすのなく

萬葉集十に出づ、初二句、冬フユ隠カクレ春ハル去サくらし、結句うくひすなくもとあり

うくひすの羽風をさむみかすか野のかすみの衣いまはたつらん
六帖霞に出づ、結句今やたつらんとあり

春哥の中に

源 重之

春たちてほとやへぬらんしからきのやまは霞にうつもれにけり

家集に、二の句ほどは經ぬべしとあり、活字本同じ

天曆御時御屏風に云々

大納言延光

須磨の海人の鹽やくけむり春くれはそらに霞の名にやたつらん

能宣集に須磨の浦のもしほの煙春くれば空にかすみのなにやたつらん」とあるは同歌なるべし、三十六人集本には、三の句春なれば、五の句なほやたつらむとあり

春哥中

題しらす

壬生忠岑

をしむへき庭の櫻はさかりにてこゝろそ花にまつうつりぬる

忠見集にも入たり、いづれか然らむ、忠岑集には見えず

五十首の歌めしけるついでに

後鳥羽院御製

あたら夜のまやのあまりになかむれば櫻にくもるありあけの月

建仁元年二月老若五十首歌合には、作者女房とあり

春哥下

延喜十七年歌たてまつれと云々

つらゆき

なかれゆく蛙なくなりあしひきの山吹の花いまやちるらん

六帖山吹に出づ、初句ながれくる、結句にはふべらなりとせり、家集結句六帖におなじ

夏哥

亭子院歌合の時の歌

よみ人あらす

いつれをかそれともわかむ梅の花のさける垣根をてらす月かけ

清正集にもみゆ、二の句わきてをらましとせり、亭子院歌合は本集にお

なじ

中納言行平家の歌合に

夏ふかき山里なれとほととぎす聲は去けくもきこえさりけり

在民部卿家歌合、本集におなじ、萬代和歌集三夏にも見ゆ

亭子院歌合に

なつの池によるへさためぬ浮草の水よりほかにゆくかたもなし

今本亭子院歌合には夏の池によるべ定めぬうきくさのみつより外にすむ方もなし」ごありて、作者興風としたり

秋哥上

題しらす

小野小町

なかめつゝすくる月日もあらぬまに秋の景色になりけるかな

小町集、他本とあるうちにあけたる、別れつゝさるべき人もあらぬまに
ごあり、下旬本集の如し

題しらす

よみ人あらす

秋風のなきたよはすあらくもは棚機津女にあまつひれかも

萬葉集十に出づ、秋雑歌の中の一首なり

七夕の心を

人丸

あまのかは霧たちわたる棚機のくものころものかへる袖かも

萬葉集十秋雑歌七夕に出づ、二の句霧立上とあり、赤人集にいりたるは、
下の句雲のころものあへるうらかなとせり、家持集に入たるは、上の句
萬集の如し、下の句かへるすなびくとしたり

八日の朝よませ給ける

延喜御製

彦星のわかれて後のあまのかはをしむなみたに水まさるらし

家持集にもみゆ、二の句別れてにとしたるわろし

秋哥中

月の歌の中に

西行法師

あまのはらおなし岩戸をいつれとも光ここなるあきの夜の月

大藏卿宗卿集に、鳥羽殿にて月のあかりしをり、郁芳門院女房の中にたてまつりし、「天のはらおなじそらなる月かげのあきしもいかでてりまさるらん」返し御匣殿、「そよやげにいでそふ月はなけれどもひかりここのなる秋のそらかな」とある贈答のうたの、上下をとり合せたるに似たり

家の屏風に
紫式部

くもりなきそらの鏡とみゆるかなあきのよなかくてらす月かけ
天喜四年四月廿日、皇后宮春秋歌合八月十五夜月、作者伊勢大輔とある、これも同じうたなり

秋歌下

秋の題の中に
よみ人志らす

秋萩のえたもこをよに霜おきてさむきときにもなりにけるかな
萬葉集十詠露に出づ、三の句露霜置、下の句寒毛時者なりにける可聞

あり

寛平御時きさいの宮のうた合のうた

秋山はからくれなるにけりいくしほ時雨ふりて染むらん
六帖紅に出づ、初句秋の野は、結句ふりてそめけんごあり

冬歌

冬の初のうたとて
藤原光俊朝臣

冬のきてまぐるゝときは神南備の森の木はふりにこそふれ
紀氏新撰に、「神無月まぐれとゝもに神なびのもりのこのはもふりはしめけり」ごあり、本集一本これに同じ

題しらす
よみ人志らす

なには江にわかまつ舟はこきくらしみつの濱邊に千鳥なくなり
本集古一本に二の句わかまつ舟や、結句千鳥志ばなくとあり、六帖はま千とりに出づ、初句なにはつにとせり

題あらす

人 丸

夜をさむみ朝戸をあけてみわたせは庭もはたらに雪ふりにけり

萬葉集十詠雪に出づ、二の句以下、朝戸乎開出見者庭毛はたらに三雪落有（ヒラキテミレバ）ごあり、家持集にも入たり、結句あわ雪ぞふるごせり

戀哥一

題しらす

おほつか何の色ともしらねともたゝ深くのみおもひそめけん

本集古一本に、下句たゝ深くこそ思ひそめけれとあり、六帖色に出づ、うた本集におなじ

いもせかはなひく玉藻のみかくれて我はこふも人はしらしな

本集一本に結句人やしらましとあり、六帖水藻に出づ、うた本集におなじ

なつの野のくさしたかくれゆく水のたえぬ心あるわれとしらすや

六帖水に出づ、うた本集に同じ

寛平御時后宮哥合

人しれすしたに流るゝなみたかはせきとゝめなん影や見ゆると

新撰萬葉上に見ゆ、うた本集におなじ

堀川院御時艶書の哥を云々

權中納言國信

なかれいつるしづくに袖はくちはてゝおさふるかたもなきを悲しき

堀川院艶書合には、作者左大辨とあり、權中納言國信卿とは異なり、同じうた合のうちに、源中納言國信とあるぞ此卿のにはあるべき

宰相中將忠教

人しれぬ戀路にまごふころには涙はかりぞさきにたちける

本集一本に大納言忠教に作る、今本三の句あるべにはごあり

返し

禎子内親王家攝津

戀路にはふみたにみしとおもふ身に何かはかゝる涙なるらん

本集一本に作者前齋院家紀伊ごあり

題しらす

よみ人しらす

片糸もてぬきたる玉の緒をよはみみたれや志なむ人のしるへく

萬葉集十一に出づ、新撰萬葉上、新勅撰戀二にも見ゆ

なかひら朝臣のもとより云々

よみ人しらす

こもりえにおもふ心をいかてかは舟さす棹のさしてしるへき

本集古寫本に、二の句こもる思ひをとりあり、勢語三十三段にも見ゆ

題しらす

わたのそこかつきてしらん人しれすおもふ心のふかさくらへに

是則集、六帖水、後撰戀三にも見ゆ、作者是則とあり

夕月夜あかつきやみのほのかにも見し人ゆるるにこひやわたらん

萬葉集十二に出づ、三の句不明、結句戀渡鴨とあり

女につかはしける

業平朝臣

なみたにそぬれつゝしほる世の人のつらき心はそてのしつくか

紀つらゆき集六にも見ゆ、活字本同じ

堀川院艶書哥に

大納言忠教

つらさには思ひ絶えなんとおもへともかはかぬものは涙なりけり

今本作者前齋院宰相とあり、蓋し此返歌作者の前關白家肥後の誤ならむ

か

戀哥二

題しらす

よみ人しらす

鹽竈の浦さはなしに君こふるけむりも絶えすなりにけるかな

古寫本初句もしほやくとあり

みちのくのちかのしほかまちかなかららきはひとにあはぬなりけり

六帖鹽釜に出づ、下の句はるけくのみもおもほゆるかなとせり

伊勢の海ののをよみなどのなかれえのなかれてもみんなの心を

六帖江に出づ、うた本集に同じ、萬代集九戀一にも見ゆ、夫木抄雜七湊にも入りて、三の句ながれ江にこせり

戀のうたの中に

鎌倉右大臣

難波瀉浦よりをちになつ浪のよそにきゝつゝ戀やわたらん

金槐集に、三の句なくたづのとあり、同一本は本集の如し

題しらす

よみ人しらす

世の中のうきもつらきもかなしきも誰にいへとか人のつれなき

六帖うらみに出づ、うた本集の如し

思へともきえぬ憂身をいかにしてあたりの風にありとしらせん

六帖雜風に出づ、うた集の如し

戀哥三

題しらす

よみひとしらす

つゆはかりたのめかおかん言の葉に志はしもとまる命ありやと

亭子院歌合、六帖(ことのは)ともに、二の句たのめおかなんとあり、萬代集一戀二に出たるも同じ

あつさゆみひきみひかすみ昔よりこゝろは君に寄にしものを

勢語廿四段に出づ、二の句ひげごひかねごとあり、本集一本も然なり、

新勅撰戀四にも出づ

ともすれは跡たえぬへきかへるやま越路の雪はさそつもるらん

萬代集十一戀三に出づ、結句さやつもるらんとあり

戀哥四

寛平の御時後の宮のうた合のうた　よみ人しらす

いとはれて今は限りとしりにしをさらに昔のこひしかるらん

寛平中宮哥合、今本おなじ。新撰萬葉結句被戀絶とあり

昌泰四年八月十五夜哥合に戀

おしなへてうつろふ秋もあはれてふ言の葉のみを變らさりける

題しらす

霜枯になりにし野へとしらねはやはかなく人のかりにきつらん
つらゆき集にみゆ、契冲云續後撰は、六帖より撰びこられたるなり、六
帖大鷹狩に出づ、類従本貫之集、野へチヤゴ、はかなくチかひなくとし
たり

戀哥五

題しらす

よみひごしらす

三輪の山しるしの杉はわかすともたれかは人のわれをたつねん
六帖雜思人をたづぬに出づ、わかずチかれずごしたり
はては身のふしの山にもなりぬるかくゆるおもひの煙たえねは
六帖烟に出づ、伊勢集も同じ、うた共に本集の如し
わすられぬ心をいまはうらめしきかつはかきりと思ふものから

六帖雜思忘れずに出づ

いせの海にあまのとりてふ忘貝わすれにけらしきみかきまさす

六帖貝に出づ、うた本集に同じ

雜歌上

題しらす

よみ人しらす

すみよしのえなつにたちてみわたせは武庫浦よりいつる舟人

萬葉集三に出づ、作者高市連黒人ごあり、四の句六兒乃泊從させり

つらゆき土佐任はて云々

君こひて世をふるやとのうめのはな昔の香にそなほにほひける

土左日記には、あるひとのよめるとあり

雜哥中

題しらす

よみ人しらす

山の端にいさよふ月をいてんかとまちつゝをるに夜を更けにける

萬葉集六に出づ、忌部首黑鷹恨友^ト來歌とあり、また卷七詠月にも出たるは作者なし、本集は卷七によられしなるべし、六の卷は月をチ月のとありて、下句我待君之夜者更^{オホ}降^チ管とあり、七の卷には、結句よぞくだちけるとあり

雜哥下

題しらす

よみ人しらす

ゑら浪のよすれはなひくあしのねの浮世の中を見るかかなしさ

六帖芦に出づ、作者つらゆきと有り、四の句うき世の中は、結句みじかゝらなんとあり、家集は、六帖におなじ

羈旅哥

祭主輔親物へまかりけるに扇つかはすとて

よみ人しらす

別路のくさばにおかむ露よりもはかなきたひのかたみともみよ

祭主輔親集、詞書、秋ものへゆくにあふぎ心さすとて人、「別路の云々かへし」しのはれんをりくことのなくさめはあふきにそへる君かうつりかとあり

成尋法師入唐の時母のもとによみてつかはしける

おもひやる心の中のかなしさをあはれいかにといはぬ日そなき

萬代集十七雜四に見ゆ、うた本集の如し

題しらす

よみ人しらす

くさまくら旅にしあればかりこもの亂れて妹にこひぬ日はなし

萬葉集十二、羈旅發思に出づ、二の句たびにし居者レとあり

なにはとをこきいて、見ればかみさふる生駒の嶽に雲そたなひく

萬葉集二十、作者梁田郡上丁大田部三成、四の句伊古麻多可稱爾とあり

賀哥

題しらす

よみ人しらす

終

